Dec. 1890
no. 245

女學雜誌

明治二十三年十二月廿七日
第二百四十五號
一册六錢　每土曜日發兌

新年附錄

知盛　雲峯子

禁酒　安藤太郎

元旦配達

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1104
J94+

Dec 1890
no. 245

女學雜誌

明治二十三年十二月廿七日
第二百四十五號
一册六錢　毎土曜日發兌

新年附録

知盛　雲峯子

禁酒　安藤太郎

元旦配達

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜 女 學 誌

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 245. DECEMBER, 27TH. 1890.

第二百四十五號目次

EDITORIAL :—Turning the eye toward one direction of the heavens.

WORDS AND DEEDS :—The Old Year and Human Life.

MISCELLANEOUS :—The necessity of Female virtue. (Matsumura Kaiseki). "On the Europian Women." (Hoshi Toru). On leaving home for a change. (Unposhi).

HOUSEHOLD SCIENCE :—The Spirit of "Household Science." (Saito).

NOVEL :—"Danchō." (Misao.)

PHYSIC :—Questions and Answers. (Yoshida Shin).

CHILDREN'S COLUMN :—The Children of the Wealthy parents and of the poor one.

LITERATURE :—Jpanese Poems.

CRITICAL NOTES :—"Japanese Grammar." "Woman." (Muzoshi.)

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

社說　歳末天の一方を望む

言行錄　英雄死するを思ふ

雜錄　女子徳を修むるの要(松村介石)●星亨君歐米婦人に關する話(下)櫻水子●古今集中の考物(まさを)●養痾の門出(雲峯子)

家政　家政の精神(小糸)

小說　斷腸(下)みさを

理學　問答二件(吉田のぶ子)

兒籃　金滿家と貧乏人の子

文學　和歌數首●舊都の月(源平盛衰記)

批評　日本文典●毘太利物語●婦女子(撫象子)終る一ヶ年間の小說界(谷口清駿)

問答　二則

寄書　吉野の朝の末路を詠す(旭光千代)

時事　議會內の信徒眠れる乎●基督教徒●佛教信徒●窮民救助法●婦女子と政社集會法●咄何等の怪報ぞ●婦人の監獄取締●鳥尾將軍●豫算委員●廢娼バザ！ル●廢娼の聲四方に反響す●死を決して廢娼建議を爲さんとす●實業家政談演說會●宇宙神教の使節

新誌

通信

女報

週報

第三版

百人一首講義

製本落成

上製美本　五十錢　郵稅六錢

並製淡裝　三十五錢　同　四錢

正月の稽古に宜し　歌留多遊びに宜し

遺物に宜し　詠歌に宜し

製本落成

此百人一首講義は、歌の意味、文法、を極く分るやうに說明し、其上詠み手の畧傳と其歌を詠みたる時は何如なる場合ありしかを一々分說し、小倉山紅葉の色々を一ときわにして、千古口に暗誦したる歌の心に、大光明を發たしむ。此講義を讀みて后ちに歌を朗吟すれば、味ひ新たなり、かるた遊びにも、歌の修業にも、遺ひ物にも、正月中の讀物にも、至つて宜し。代價甚はだ安けれども、尙之を安くし、即はち無代價にて之を買入るゝの方は、本年內に女學雜誌一ヶ年分の前金を拂込むにあり、然らば本社は之をお祝ひとして呈上すべし。

女學雜誌社

定價

一冊。	六錢	郵稅。五厘（但府內無郵稅）
十冊。	五拾八錢	郵稅。五錢（同前）
半年分	壹圓四拾三錢	府外は　壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は　貳圓八拾六錢

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百四十五號 明治二十三年十二月廿七日發兌

社説

歳末、天の一方を望む

一年亦將に過なんとす。坐ろに來し方を思ふて、万感胸に溢る、あゝ此の一歳は、抑も何事の爲めに使用したるぞ。春天四方穏やかにして百花笑ひ躍るの頃ほひ、人は只だ狂へるが如くに爭ひけり、云はく本年第一期の議員撰擧に我黨の人を撰出せしめずんばある可らずと、蝶は舞ひ、鳥は樂しめども、人間に餘裕あるヿなかりき、夏來り、熱氣滿ちて、天地烈火の燃ゆるが如し、左れど時に微風徐むろに起りて、俗熱を一掃するヿなきにしもあらず、特に朝たの露は草頭に玉を點じ、夕べの風は、窓を打ちて清客の來れるヿを報ず、天地亦た樂しきが如し、唯り、人間は聊さかも慰さむるヿなし、國中終日修羅を闘はせ、叫喚月を越へて止まず、夫は之が爲めに妻を離縁し、子は之が爲に父を棄て、骨肉は之が爲めに矛を交へ、萬戸の家悉とく破れて、四方皆な戰塲と化しぬ。當時吾人は歎く所ろを叫びて云へり、「諸君思へ、議員と爲ると爲らざるとは幾干の相違ぞ、其相違は即はち唯だ一つに非ずや、云く、議院内に入りて手を擧ぐるヿの出來ると出來ざるとの相違是れ也、而して其の手を擧ると云ふものは純粹に手を擧る丈のヿなり、自個の意見を現はすヿは手を擧ざるとも現はし得べく、又議塲外にありても現はすヿを得べし、故に議員となるの利益は、議塲内に入りて只だ器械的に手を擧る丈のヿあり、嗚呼手を擧る丈に數千圓の入費を費やし、數ヶ月の勞力を費やし、殆んど半狂亂の躰にて騷ぎ廻るヿは、抑そも何の心ぞ、お爨も棚に向つて手を擧るなり、猫も肴に向つて手を擧るなり、犬もチンチンを爲すとて手を擧るなり、帝國議會の議員が手を擧るは何故に尊とき乎」と。然れども、我が同胞は、此の手を擧る丈の事をすさまじきヿに思ひ、熱闘奮戰して、在ん限りの權略を用ひ、辛ふじて其同穴の人、もしくは御自身親から議塲に出席するヿゝなりぬ。扨て十一月廿九日、上下兩院定めの如く開塲したり、爾來今日に至る迄て、世人が聞見したる所ろ果して何事ぞ。

貧しきものが金を都合するの樣を見よ、巧みに遣り繰をすれ

ども、到底無きものは無きもの也。左官が黑泥の上に上は塗をするを見よ、表てに白堊を着けて暫らく人目を惑はすと云へども、黑泥之が爲めに白くなれるにはあらず、一と度び動かして之を振へば、白堊は忽まち剝落す。現今世人が爲す所ろの事亦如斯し。云く、進歩、進歩と、惡人と善人と共に其丈の伸ぶるが如く、世間の事亦何れにか進歩すべし、只だ進歩するを以て善化したりと爲すと能はず。又云く、改革、改革と、然れども吾人が目を以て之を見れば、今の所云る改革とは、貧者の遣繰を去る遠からず、左官の上塗に異なると多しとせず、必竟たゞ一時の間に合せに過ぎざる也。之を以て、議院を開くとも、昔しの相談に異ならず、立憲政を布くとも、古しへの暴政と違ふとあらず、海舟翁をして之を罵らしむれば、今の明治政躰は、德川の末路に均しと云はん。若し傳道者をして歌はしむれば、曩に有し者はまた後に在べし、曩に成る事は亦後に成べし、日の下には新しき者あらざるなり、見よ是は新しき者なりと指て言ふべき物ありや、其は我等の前にありし世々の既に久しくありたるもの也、己前の者の事は之を覺ゆるとなし、后のものゝ事はまた后に出るもの之を覺ゆるとあらじ、われ傳道者はヱルサレムにありてイスラエルの王たりき、日の下に作ところの諸の行爲を見たり、嗚呼皆な空にして風を捕ふるが如し」と歌はん。

左れば此の一歳も空に過ぎ行きぬ、選擧熱望者が慷慨の演説も、空行く風の如くに吹去り、進歩主義大政黨の樓閣も瓦の如くに碎け、議塲内六百の討論は、餓鬼が陀々を言ふに異ならず、嗚呼此一歳も空に過ぎしける。歳月流るゝが如く去つて、去るものは復たび歸らず、嚣々たゞ騷いで一年を一年の上に埋葬し、人生七十徒らに功なくして土に化す。遺憾何ものか之に如かん。あゝ同胞、靜かに思へ、靜かに思へ、最と靜かに思へ。

夫れ人間の生れ出づる安くんぞ偶然ならん、此の木、彼の木に異なるとなし、然れども此人、決して彼人に同じからざる也。人々個々各自に天職を奉じて世表に出現す、頭らには天を戴だき、足下に大地を踏む、宇宙嚴然として四方にあり、吾等が世に存する、安くんぞ襟を正し、肅々焉として勤むる所あらざるを得ん。

而して、吾人が爲さんと欲する所ろの事は、徒らに動かざる

にあり、空に勞せざるにあり、塞の河原の憫れむべき子等石を積んで亦た之を崩す、吾人が爲す所ろの事業は此如く空ならざることを期するにあり。バベルの塔は天に達せず、然れども、若し理法に從がつて石を積まば、遂に天に屆かざることあらざる也、吾人が爲す所ろの事業にして若し歩々大道を履まば、進歩長久なへにして、改革退却すること必らずや無し、人はたゞ大道を履まずして曲歩徑行するが故に遂ひに進まざる也。

たとへば、撰擧せらるゝとせよ、候補者たらんものは、衷心確信する所を明白に演説し、只だ其在の儘を以て撰擧區の人に問ふ所ろあるべし、幸にして若し相合はゞ即はち撰擧區幾万の人を代表し堂々濶歩して議場に出席すべし、而して議場に於ては昂々乎立つて其確信する所ろを明白に剛辨し、如何なる情實にも、如何なる反對論にも屈する所ろなかるべし、若し幸にして用ひらるれば其事成る、不幸にして合はざるとも、憾むなかれ、其説を實行するに當りて必らずや一度び遭遇せざる可らざるの困厄に出合ひたるに過ぎず、今や之に一擊を加へ置くは則はち異日の成功を一歩進めたる也、如此くして議場より退けらるゝも、わが事業失敗したるにあらず、異日大成功を必奏するの礎を固めたるに過ぎざる也。然れども、初めより無理をして撰擧せらるれば、終に至る迄で無理をして其地位を保たざる可らず、終生手品の力によりて宙天に掛り、只だ其地位を維持し得たりと云ふの外、何事も爲したることなし、斯くして人の一生何の價値かあらん。

君子徑に依らず、行くに必らず大道を以てす、大道の歩み甚はだ緩漫なるが如くにして、到底迅速なり、彼の局促として狂奔し、終年終生常に忙々焉たるものは、一生を狂へる風の如くにして吹渡つて何ものをも遺さず、たゞ樹木を倒し、屋家を覆すに過ぎざる也。

左れば人よ、本年の經驗によりて、深く自省認識せよ。徒らの運動は枯木の動くよりも詮なし、根底なき進歩は薪の花を着けたるに異ならず、虛聲空名は鐃鉢の心なき響に均し。眞實なれ、正直なれ、勇猛なれ、朝たに大道に向ひ、夕べに一歩の進みを樂しみ、行方の理想を確認して、四十年砂漠にさまよふとも、之を遲しとすることなかれ。如此くして、人世初めて約束のカナンに達することを得ん。

言行

英雄、死するとを思ふ

しのぶ

朝たの鐘霞を破り、烏勇ましく梢を離れ、家鷄戸々の曉を報ずる頃は、心地自づから清らかなり。日將に西に沒せんとして、殘んの光名殘を西の雲に映し、樹の葉入相の鐘の音にひゞきて一つ二つハラ〳〵と落つ、暮れ行く景色は何となく淒しく悲しきものなり。一年の變化亦た一日の移り行くに似たり。春は何人も笑ひぞゝめけども、年の將に暮れんなんとするに臨みては、壯者も尚ほ穴に入る心地す。かくて思ひ出づるは、人間の死と云へるとありけり。紅顏忽まち白髮の老面と化し、山川を跋渉したる足ちゞみて閾を超ゆる能はず、志望半ば成らずして、墓の使すでに來る、歲晚の感を臨終の心地に比較すれば、老ひて終りの近づくは、最と心細き者ありけり。

○死の一字は、萬戶侯をして屈服せしむ。何如に權威あるものと云へども、其聲を聞けば、聳然として身を震はざるとなし。曹孟德百萬を率ひて氣宇宙を呑み、慷慨矛を横たへて赤壁に歌ふの時、忽焉此に考へ及ぼし來れば、淒然として聲極めて悲し。秀吉諸王の上に王となりて天下を掌の中に丸弄し、地上の事一つとして思ひに違ふとなし、左れど到底死を觀じ來れば一切の光榮悉とく空に歸し、泣て

露とうまれ、露と消ゆる我身かな

と叫ばざるを得ず。夫れ此に至らば、權威あるものも幼な子の如く、有てるものも貧しきが如し、身、林の如き兵に將たりと云ふと雖ども、死の來るを防ぐと能はず、富全地に充てりと云ふと雖ども、遂に一杯の土に歸せざるとを得ず。ペルシヤ王サイラス、遺命して石碑に刻ましめて云く、

人よ、わが命運を羨やむと勿れ、ペルシア大王の一期の末は、即ち此石の下の土あり。

ザーキセス、百萬の猛卒を率ひ、威風天地に震ひて、進軍す、冑の光朝日に映じ、鎧の袖玉を散らし、旗翻々として龍の舞ふに似たり、ザーキセス馬上に之を眺め、嗚呼壯んなる哉、壯んなる哉と云ふ、忽まち悟り長大息して云はく、然れども百萬の兵、その一人だに能く百歲の壽に達するものありやと。夫れ、死の事を思ひ來れば、勇者も猶匹婦の如し、驕れる人

も、最と卑きものに均し。

否なく、死は人の思ひを悲しくするにあらず、人の思ひを正しくするなり、榮華煩惱に惑ふ人の心も、死の聲の聞かば忽まち悟して其本色に歸る。古人云く、鳥の死なんとするや聲悲し、人の死せんとするや言善しと、蓋し死は人をして眞面目ならしむるもの也。

左れば、死を思ひ思ふて而して更に望を得たるものにあらずんば、眞の人にあらず。名の爲に働らくものよ、死することを思へ、富の爲に働らくものよ、死することを思へ、死することを知つて而して尙ほ能く働らくものあらば、其人始めて私し無く、我無し、此に於てか、至誠至公、多く勤めて何をも求めざるの節あることを得。故に人は、先づ死せざれば生きず、一旦心に死を思ひ思ひ、浮世の榮華を肉と共に葬むりて、靈更らに復活し、魂しひの死后尙ほ永存することを信じて、假りの宿りに露玉の善行を遺さんことを欲す。われ既に世に求むる所ろなし、但だ同胞を思ふによりて働らく。それ此に至りて人初めて虛榮なく、信じ且つ歌ひつゝ勤むることを得。先なる人はすでに死しぬ、后なる人生れかはりて立てり。

雜録

女子德を修むるの心得　松村介石

第三種　脩德を力むる人（上）

嗟吁、余輩は漸く快よからぬ二文章を草し畢んぬ、惟ふに讀者も亦前號不祥の二問題を閲して必ず面白からぬ心地やしけん、勿論、人の機嫌を損はざらんことを是れ勉め、惡醜の怨むところたるを恐怖れて、猥りに諛言曲筆を弄す、是れ幇間の亞流のみ、余が願ふ所にあらず、然りと雖も醜を書くと美を示すと惡を懲すと善を賞すと、其間大に差違なきを得ず、然而して今や醜を書き惡を懲すことを終へ、而して善を揚げ美を示すの順次となりぬ、其狀宛ながら荒凉肅殺の秋林を過ぎ、始めて陽春駘蕩の野に入るが如し、欣情何ぞ堪へん。さて脩身を力むと申す、他の義にあらず、己れ自ら決心して何處までも道德の人たらんことを熱願すると即ち是れなり、設令へば第一の種類若くは第二の種類に於ても、一旦翻然、昨の非なるを痛悔し、曰くア、我れ惡なりき、曲なりき、誤て

世を渡りき、過を重ねき、人の怨厭、世の嘲笑をも顧みず、天を侮り、身を欺き、佞奸氣隨の罪人なりしと、所謂玆に悔悟して、始めて脩德に志すもの、之を此種の人物とす。

然而して此所謂る悔悟なるもの、そも〳〵如何なるところより起る、曰く種々の原因より起る、或は說敎を聽て起るものあり、或は書を讀んで起るものあり、或は仁人の行爲に感じ、或は志士の高義に耻ぢ、而して忽焉澎湃として煥發し來るものあり、蓋し此等は高尙なる類なり、若し夫れ劣等に至ては、己が罪過の穴に墜ち、窮窘困頓、始て前非を悟るもの、惡謀敗れ、猾手露はれ、刑辱苦惱、始て悔改を誓ふもの、其他萬別、細かに之を云ふべからず、サレバ悔改の程度に於ても亦自ら深淺厚薄の別あるを見る、玆に人あり、公言して曰く、余大に悔悟せりと、然れども言行更に改まらず、是れ虛なり、人あり、大に悲んで曰く、余前非を悔ゆるに堪へずと、然れども彼れ容易に其非を襲ぬ、是れ淺なり、然るに玆に一人あり、天を仰ぎ胸を打ち、罪人なる余を憐み給へよと、叫ひ泣いて神明に祈り、決然遂に悔改を誓へり、然り而して就て言行を窺へば、彼れ全く甦生の人となる、是れ其の悔の深なるものなり、試に此人を誘ふに惡を以てせよ、彼は聽て憤怒せん、試に彼に對して彼れが舊故の罪を問へ、彼は聽て戰栗すべし、試に巧言以て彼に向ひ、告ぐるに彼れが尤も陷り易き急所の弱點を以てせよ、彼は聽て沈吟せん、或は聽て傾かん、然れども須臾にして色變じ、容改まり、儼然、否、と答ふべし、何となれば假令ひ一時は負るが如く見ゆると雖も、嘗て悔ひ改めたる一生の決心は凛乎として動かすべからざるものあればなり、尤も時としては誘はるゝこともあらん、過つこともあらん、さばれ其決心や已に忍克の點に凝る矣。此故に一敗愈々振ひ、一倒愈々勵み、益々德域に發達し、而して遂に破天空の大樹となる、嗚呼景仰すべき哉、此人也。

蓋し自省なき人ほど憫れむべく、又詮方なきものはあらず、自省なき惡人は、忠告に會ふて即ち怨怒す、自省なき輕浮者は訓誨を聽いて輙ち眠る、之を戒しむれば即ち口角泡を噴き目を瞋らし辨解を試む、之を戒しめざれば、輙ち、縱橫放恣、所謂る、朽木糞土となる、然れども今此の第三種の人に於ては、忠言甘きこと密の如く、善美を慕ふこと飢渴の如し、何とあれば彼れは日々反省して己が罪惡を改除すと雖ども、猶ほ

其の遺漏なき能はざるを知り、人に依りて我非を視んとを求むればあり、毀譽褒貶は有無の如く、唯だ其れ善美を求むればなり、彼れは一非だも多く去り、一善だも多く得んとをのみ是れ願ふ、此故に啻に友人の忠言を以て足れりとせず、啻に教師の講話を以て足れりとせず、已が敵人の譏謗誹譏すら、尚且つ之を聽かんとを求む、蓋し、敵人こそ已が他山の石なれと信ずればあり、若夫れ手腕罪を犯せば彼れは之を斷つとを厭はず、若夫れ眼目罪を犯さば、彼れは之を抉き出すとを怖れず、利己の心起らんか、自ら叱して之を斥く、不潔の情念發せんか、泣いて我修養の足らざるを悔ゆ、彼れの志ざすところは、聖域に在り、此故に標準を世人に置かず、唯夫れ神傑圓滿を期す、周圍皆醉ふて彼れ獨り醒め、衆人皆濁りて彼れ獨り澄むとも、敢て之が爲めに負慢せず、尚ほ高天を望んで昇る、得喪に窮々せず、褒貶に戚々せず、高踏遠視、獨り品性の脩養に從事す。

思ふに我朝後光明天皇の如きは、即ち此種の人にましませし、嘗て雷鳴を怖れ玉ひしが、大に其性の不及を嘆じ、乃ち夏月大雷毎に椽前に出で、脩練其度を重ね、遂に其偏性を變じ玉ひしと云ふ。

古昔羅馬の雄俊ケイアス、グラカスは、即又此種の人あり、嘗て其性の猛烈に失するとを患ひ、其僕リシニアスをして屢々側に笛を吹かしめ、大に其猛性を柔らげしと云ふ。

我友人某、輕躁の癖あり、常に頗ぶる、之を悲しみ、乃ち深山大澤の下に行き、沈氣靜觀、月を重ぬると數十、遂に其癖性を矯め得たり、此等は孰れも此種の人なり、若夫れ膽力の無きものは即ち孟子が心を動かさゞるを學び、怒癖の在るものは乃ち顏子が怒を遷さゞるを習ひ、身勝手自惚の癖あるものは乃ち省みて復び其罪に陷らざらんとを是れ勉め、慳吝不注意の者は乃ち人の己を指ざすあるを覺り、悔いて厚博慈仁の人たらんとを是れ志ざし、我儘氣儘の男女等は其身の朽木糞土たるを悲み、翻つて誠意貫心の人たらんとを冀ひ、佞者は罪を恐れ、讒者は天を畏れ、曉然悛悔、已が本真の性に反りて、決然甦生の人たらんとを誓ふ、是等は即ち此第三種の人物なりとす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

星亨君歐米婦人に關する話（下）

櫻水子手記

婦人の劇勞

更に話頭を進めて曰く、歐米の婦人は啻に內事、書き役等を任ずるのみならず、外事の劇勞にも當るなり。或る婦人は代言人となりて法廷に辨爭し、又或るものは男兒も尙ほ難んずる船乘となり、副船長とまでになれる婦人ありて、其雄々しきと男兒もホト〳〵閉口せざるを得ず。其他非常なる著述家、敎育家等ありて、婦女の敏腕能く鯨鯢を掣する事のあるは、世人の夙に知る所ならむ。

婦人は社會の半面なるか

尤も然り、歐米婦人の、社會に向て勢力あるとは實に驚くべきものあり、宴會往來は勿論、政治上に於て其潛勢力を有する事は、恰も我邦の黑幕宰相の如し、一たび其逆鱗に觸れなば、如何なる政治家と雖ども育くならざるを得ず。併し是迚一朝一夕の出來事にあらず、深く其養ふ所あればなり。卽ち、

英國の女皇陛下

は實に英國婦女の大師範なり、大敎育家なり、最初英國に女皇の位に卽かれしより、英國婦人社會の面目は、頓に一變せりと云ふ、今も尙ほ英國の婦女は、女皇のなさるゝ事を手本とし、標準とするが故に、其一擧一動一顰一笑は、忽ち英國婦女の倣はんとする所なれば女皇の御身の上も亦難いかな、

然れば我邦婦人社會の改良も

畏くも我　皇后陛下こそ大御本なれ、本邦臣民男女を問はず、事に忠順なれば、況いてや一度び　皇后陛下が高德以て御奬勵遊ばさるゝに於ては、我邦の婦女たるもの、豈に草の如く靡かざるものあらんや、

如是我聞

我邦の所謂貴婦人と唱ふるものは、近來慈善舞踏會とか、慈惠病院とか、云ふ類のものを初め、頻りに我邦婦女の改良を促すと云へり、然れども、個は歐米の糟粕を啜るものにして、眞に惻怛の心よりして起るものとも思はれず、何となれば其慈善會より我邸に歸るや、忽ち怒火を燃し、憤焔を吐き、僕婢に對しては恰も牛馬をあしろふと一般の姿あり。又其家庭を細視すれば言ふべからざる惡弊の存するあり、不潔極まるにあらずや、之を要するに、我邦婦人社會の改良進步を望まば、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

先づ上流婦人より改めて參らずばダメなり。

外國のホーム

秩然として能く整ひ、一家團欒の和樂あるものは、外國のホームなり、清潔にして能く親み、淡泊にして情深く、無邪氣なると恰も彼の樂園なるかと疑はるゝものあり、然れども是れ一朝一夕に成りたるものにあらず深く養ふ所あればなり。

本邦の家庭

前にも申したる如く、我國の家庭は實に亂雜極まれり、之をヒドク云へば家庭とは申しがたし、禽獸の穴居なり、此有樣を改良するにあらざれば我國の文明得て望むべからず、故に予は先づ一家〳〵より改良進歩せしめんことを希望す、故に是非普通學科位は婦女子も學ばずば所詮役立ずと思ふ。

廢娼論は如何

我邦の廢娼論者には少しく不同意の廉あり、ソハ餘りに出來ざる事を望めばなり、元來公娼は廢し能ふべけれども多くの密娼は迚も廢する事能はざるべし然るに今の廢娼論者は之をも廢滅すべしと云へり（記者白す恐らくは星君の考へ違ひあらん今の廢娼論者も決して密娼迄を一時に滅すべしとは云はず先第一に公娼を廢すべしとてこそ申すなれ）予の考へにては今の如く大厦高樓を打建てゝ遊郎を招く公娼を廢するは勿論都下所々に散在しある藝妓の類も今の儘に捨て置かず之をも一方の片隅に逐ひやりて嚴重に取締り決して見苦敷事なき樣せざるべからず、實に斯る事にては一國の體面に係り迚も文明國の仲間入は出來まじ。

社會改良の事は如何

勿論予等の目的は單に政治上の改革に止まらず進んで社會改良に盡力せん事、吾黨の素志なり、故に我自由黨最初の規約を見よ「吾黨は社會を改良し云云」とあり、豈に啻に一小部分の仕事にて安ぜんや是より着々歩を進めて出來得る丈は何處の點よりするも可なり云々。

古今集中の考物

まさた、

かく斗あふひの稀になる人をいかがつらしと思はざるべき
人めゆへ後にあふひの遙けくばわがつらきにや思ひなされん
　右二首の中に草木の名二づゝかくれたり
山高みつれにあらしのふくさは匂ひもあへす花ぞ散ける
　右一首中に草の名一、
あぢきなし歎きつめそうき事にあひくるみなば捨ぬ物から
　右一首の中に果物三、
足引のやまべになれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき
　右一首の中に日本名川の名一、

養痾の門出（下）

雲峯子

思は亂れて麻の如し

料し來れば百年豈長しとせんや、千年萬歳只夫れ一日の如きのみ、死生誠に命あり、壽夭實に天に屬す、豈人意人力の如何とも爲し得べき所あらんや、余不肖と雖も聊か命と天とを知る、何ぞ猥りに悲しみ、空しく涙を注がんや、然れども半生企圖せし所のもの遂に一片の烟と消え、多年抱きし志全く一滴の冷露と化せんとするに至つては多少思ふ所なき能はず否微々たる企圖、鎖々たる志、烟消露化する何ぞ悲しむに足らん、男子生を此土に享け、徒食空衣、一の業なく、寸分の功なきを愧づるのみ、若夫肉身冷土となれば焉くんぞ仰ひで天に恥ぢざらん、俯して地に愧ぢざらん、是をして天命と明らめ得ば何事か恥づべき、嘗てカーク、ホワイトの憂鬱記を讀みぬ、其一節に某友人の事を記す其意に曰く「嘗て一友あり、稟平たる勇意、勃如たる英志遂に抑ふる能はず、手に攜ふるものなく、囊中貯ふる所なく、飄然去つて天涯に遊べり、自ら謂へらく宇宙眼前にあり、ゴールドスミスは我慕ふ人、大事を爲す實に此斯にあり、豈鬱々幽居すべけんやと、彼一度去つて再び歸らざりき、ホワイト友情温かにして打捨て置くに堪えず、跡を慕ふて漫然旅行の途に上りぬ、伊國某府に於て見、面影よく似たりけり、彼ホワイトと知りたりけん、直ちに隱れて遂に見えざりき、彼非常の才識を有せり、而して斯くなり果てぬ」と、ホワイト嘆じて云ひけり

"and there can be little doubte that this unfortunate young man has found in some remote corner of the continent an obscure and unlamented grave."

斯く嘆じけるホワイトも亦後人をして斯く嘆ぜしむ、誠に不遇の徒多し、余の不肖豈少かも不遇を悲まんや、彼れ逸出の才人能者また斯の如し、余豈悲まんや、嗚呼悲まんや、

將に消えんとす山巓の三日月

余が養痾に行かんとせし所の一里許となたにて滊車止りぬ、此に達せし時は日既に消え、山麓漸く暗らく、海上遙かに波光の見ゆるのみなりき、小車を驅つて行く、此日や陰暦三日、纎月西山に消えんとし、路傍の枯梢に隱れ亦顯はれぬ、行きくれし山路の三日月心細くも匂ひけると誰れか詠じけん、我

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

が爲めに歌へる心地して悲しさ更らに止めあへざりき、旅館につきぬ、嘗て都を離れて同じく病を養ふの友喜びて出て迎へぬ、常の身なりせば如何に嬉しかりけん、憂愁堪へ難き身の何物か喜ばしからん、燈光かすかにして一室寂然として、更らに此世ともなかりき、其夜寢に入つて倘思ひ絶えず、戸外の波の音、聲々深夜に入つて悲しかりき。某日病を抑へて感を記す。

家政

家政の精神

小糸

家政てふ問題一たび世に起りしより人々こぞりて之を讃しければ心ある府下の女學校には早くも之を學課の一として加へ或は實地に鍊習せしめて課程に代ふるなど續々其必要を感ぜらるゝ事誠に悦ばしきことにこそ。されば最早女學生にして雜炊煮んとて米と玉子と醬油と一度に入れし抔の珍聞もあるまじく、裾の切れたるにインキを塗る様の究策も出でまじ。學術英語等の巧みなると共に増々家の業にも長し別て地方の人々などは夏冬の休みに家郷へ歸られたりとき父母故舊の歎息をも引くまじく、樂しきホームを至る先き〲に構てしほらしき女學生、非難なき妻、立派なる母とならるゝ事實に樂しき限りにこそ。されど彼の五六年前宛かも女子教育の上に一大進歩を得たる頃は利害相伴ふの理りにや知らず〲家の業に怠りを來したる嫌なきにしもあらず、爲めに女學の上に深く思慮をとゞめざる人々には之を學問の罪と誤認し甚しきは女子教育をすぐ難ずる者出で來りぬ。眞に歎はしき事ならずや。家政の上には未だ斯る急激の進歩も見へざれば從て未だ著しき弊の出で來るやうもあらず、されど熟々世の家政てふ方針を考ふる時は亦一種の弊なき能はざるが如し、蓋は他にあらず只此の家政なる字義を餘り窮窟に解釋したるため、家政ある事は單に家の業と心得られて、器械的の仕事にのみ汲〲し、それにて家政の心を得たるもの丶如く思意する向もなきにしもあらず、殊に方今女學校出身の方々の中には今迄少しも心にとめざりし家の業の思の外珍しきのみか、少し氣慨ある人々には是迄の女學生の名譽回復とも申べき心より外觀の整頓にのみ重きを措き宛かも又一種の學校にても入りしか

の如く感想して其課程なる家事に全心を入れ而して舅姑の甘心を買わん事をのみ勉めらるゝ事餘り喜ぶべき事にあらず。尤も今日迄稍打捨てありしとも申べき家事の決して忽にすべからざるを悟りて玆に至りたる事あれば強ち之を惡しと云にはあらねど斯して猶幾年月を經たらんには日本のホームは何時改良さるべきや、今の女學生にして例へ一家の主婦とあらるゝと思の外其理想を實行する能はざるもの往々にして之あるは蓋し是等の情實ありて不知不識の間に舊化し却て一室內に閉籠るを以て女子の淑德と考るに至れる故なるか或は確乎たる理想はあるも之を實行するの難きに倦み今日を優々の中に過さるゝにはあらざる乎、實に今時の女性は一方には舊慣すて難く一方には新奇の敎育に志想を研き而して其一身に取りては實に內に外に其責任甚だ輕からず誠に竆苦の時世に邂近せりと云はざるべからず、されど事業は其平易なるを以て喜ぶべきにあらず、前途猶茫々として而も只其困難をのみ確知する時は實に吾も人も或は落膽に墜り或は失望の鬼とならんかを疑へりされど遙かに過越方を顧みれば我等の經過せし世の峻坂徑路、其困難、其危險、却て我等の娯樂を增しいや高き希望にまで我等を導くを知る、されば我等の困難は一も憂ふるに足らず喜んで其天職を全ふすることそ却て我等の榮譽なれ。世の姉妹よ冀はくは家政の上にも此決心あらん事を。家政只外部の仕事にあらず、宜しく矯風の精神を保たるべし。それ父母舅姑の滿足を得んため能く器械的の仕事を調る、素より勉べきの道也。左れど家政の精神は一に之を以てのみ益し得たりとすべからず、元來家政は其字義の示す如く一の政事に異ならざれば精神的の事柄こそ却て機械的の仕事よりもなほ緊要なれ。夫政府如何に農工業を奬勵し、軍艦兵員を增加し富國の策、陸海の兵備等に油斷なくとも是等の事のみにては到底國民の元氣養はるべくもあらず、國民にして元氣なくば爭で外國と對等の位置を保たんや、爭て國家の隆盛幸福を保たんや、家の事も亦斯の如く、座敷には一筋の塵だもなく板の間椽側は鏡の如く輝き器物の併列誠に順序よく全家規律正しくして實に外觀上一點の非難あらざるも若し家を司るべき主婦にして愛なく德なく同情同感の念に乏しく他愛の精神に欠乏せば其外觀の美は反て虛飾の材料と化し許多の人をつまづかすに至らん。それ、家事の整頓は敎育を受ざる昔の人々も能く

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

之を調へたり、老練なる下婢も亦能く之をなし遂ぐべし、されど精神的家政に至りては獨り今の女學生其人のあづかりて其重任を全し得べきのみ、卿等希はくは露の如き雨の如き愛を注ぎ、眞理の光線に之を温め、家庭をして花果充滿せる美麗の園たらしめよ、夢め荊棘の外何をも生ぜざるすさましき砂漠と爲し玉ひそ、古き外國の諺に

睦じうして一塊の乾けるパンあるはあらそひありて宰れる畜の盈たる家に愈る。

小説

斷腸（下）

みさを

終生禍福の岐るゝ所、百年苦樂の關はるの機、何ぞ輕忽に思ひ過すべけんや、苟も身を重んじ、人を愛するもの一時の抑制に枉屈して可ならんや、縱ひ父母如何に怒らせ給ふもこたびの事のみは御心を躰し難し、身を以て改革の大任を負ひ、命を捧げて後世の爲めに計畫する者、苦艱辛痛に遇ふは古來等しく然り、妾などか此艱苦を恐るべしや。

只夫れ是れのみと云はんや、父母の命に從はゞ嗚呼最愛の人を如何、嗚呼此人を如何。

妾はかゝる心なやみに打沈みて終日打過ごしけり、其夜父上は十時とおぼしき頃歸り玉ひぬ、妾御車の音を聞きて出で迎ひけるに父上はいと打ち醉ひ玉へる樣にて踏む足も御心ならざる躰に見承けぬ、妾にはものをも云ひ給はで直ちに母上の臥し玉へる一間に入りぬ、妾亦もとの室に入り、倚物思ひにくれたりき、父上の聲の聞えて亦母上と打語らうとぞ覺えける、夫れより後は亦父上や母樣の婚儀の事は云ひ給はで過ぎし日數は十日許りなりき、はや事濟みにけんと喜びしぞ嗚呼かへす〴〵も不覺の至りなりける。

車聲轔々門外にひゞき、語音騷々庭前に近づくと覺えぬ、今日このごろ妾の家を訪ふ人あるべしとは夢更知らず、何事の起りけるにやと、竊かに思ひめぐらす内、玄關に人の呼ぶ聲聞えぬ、下婢それと心得て立出で、名刺を父上に通ぜり、客數人直ちに應接室に入りて控へぬ、父上と何か語らふ樣にて暫らく笑談快語の聲もれ聞えぬ、やがて酒宴や始まりけん、語音漸く高くなりぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此の日父上は例日に異り、官省の出勤を休み給ひ、車夫、僕婢にくさ〴〵の事仰せつけたり、あるは室内の塵芥を清め、あるは庭の面、池の渚まで掃き拂ひぬ、父上自ら古書畫を庫中に探り玉ひ、床上に掛け、鉢に水汲み取りて花を差し抔し給へり、使を四方に馳せ、器具を求め、山海の美味を調なふるも不審なりき、家の内は自ら和氣湧くが如くいと賑はしく見えけるが、妾の心は此時も沈々憂々たりき。

酒宴漸く酣なる頃父上は妾を一室に呼び、衣服を替へて客に對すべきよし告げ給へり、何故にかあらんと獨りいぶかしく思ひけるが、父上に問はんも如何にやと心づきければ、何心なく命に從ひぬ。

客間の傍に至れば父上莞爾と打笑み給ひ、こゝにと召さるゝにぞ、心得て座に就きぬ、不圖傍を見れば、机數脚うちすゑ、そが上下に取りならべたる衣服のかず〳〵いくばくと云ふを知らず、嘗て聞く女子の嫁する前に結納とやらんを容るゝ習ひなりと、若夫れにはあらずやと心づき、嗚呼百事終んぬ、事こゝに至れり、今より更らに約を變へんは蓋し難からん、さても父上は妾の否みけるを聞き入れ給はで、妾に告げずして約を調へ給ひけん、嗚呼如何にせんと、亂るゝ思ひ、前後も分かぬ心地せり、されど客は眼前にあり、此處にて女々しく泣き叫ばんは父母の恥辱恐れ多しと心をかへ、氣を張り、何思はぬ面色にて客なる人々に一禮しぬ。

閑話先づ主客の舌頭にのぼり、四方山の事など語らひつ、暫し時をぞ移しける、話柄の途絶ゆるを見、折を窺ひて父上は面容をあらため、客に申されけるは、是なん拙なき一女、過る日縁談に及びけるものなり、身の程こそ長けたれ、心未だ幼若なり、此上ながら誘導教諭の程偏へに希ふになんと、云はれけり、妾始めて先きに推察しける事の當れるを思ひ、心痛苦慮に堪へざりしが、今是非を云ふべきに非ずと悟り、亦式の如く禮を爲せり。

やがて父上の許容を乞ひ、其坐を立ち、狂ふが如く母上の傍に走りより、打俯して聲を惜まず泣き叫びぬ、母上は何故斯くは打萎るゝぞ、嘗て御身の語りし如く父上に告げ、如何にかして許容を求めんとせしが、父上は大ひに憤り給ひ、以ての外の事なり、望むが如き賤夫貧生に嫁がしめんは一家親戚の恥辱、何の面目ありてか世に立たん、思ひもよらぬ事なり、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

所詮御身の心を得て嫁がしむるは難し、如かず、先づ約を調へ免るゝよしなからしめんにはと、云ひ給へり、されば今日の事御身心には知らざりけん、今に至りては詮なし、是非に心を變へて父上の御心に從ひねと、すゝめたりき。

せきくる涙を、押し拭ひ、さりながら母上よ、怨み喞つは不孝の至りなるべけれど、父上の云ひ給へる事などか早くは告げられざりけん、先の程にしあれば如何にともなりなんを、鳴呼流れ再び源泉に上らず、往事逐に追ふべからず、悔ひあげくも詮なし、母上などか告げ玉はざりしぞ、終世の大事去りぬと歯をくひしばり、身を震はして打泣きぬ。

母上も憐れと見給ひけん、誠に御身のあげかるゝぞ理はりなる、さきに告げんとせしが、父上如何に怒らせ給ふらんと心にかゝり、思はずも秘し置きぬ、されど斯くの如くして嫁ぐもの娶るもの世上多くは然り、こを御國の習俗と知りせばさほど悲しき事もあるまじ、御身異國の事など聞き知ればこそ斯くは云ふなれ、妾の如く數十年の昔に生れたらんには快く父母の命に從ふべきなり、さるを心のまゝにあらぬとて打悲しみ、怨みなげくは鳴呼の至りならずや、涙を收めて今より心を取直すをよしとす、而か思はずやと云ひ給へり。

力と頼む母上だに、父の御心に從ふべきよし申され、父上は既に約を終へ婚期をまで定め給へりと聞き、所詮逃るべきに非ずと覺悟し、遂に承諾せりと泣く〳〵答へけり。

されど是只舌頭にて應ぜしのみ、心いかで從はん、互ひに愛し、愛せられ、比翼連理の契りを爲さばやと思ひける、意中の人未だ嘗て忘るゝ時なし、共に伴になさまく望みし、百年の大計、鳴呼此に於て雲霧と消し去りぬと、思ひまはし、且つは情緒の絶ち難きを感じ、終日怏々として暮し、終夜潛々と泣き明せしも多かりき。

婚期となれば式禮により嫁ぎ來しは此家なり、富貴たぐひなく、物として足らざるなし、若し物質によつて幸福を得べくんば妾は今無上無限の快樂あるべきに、實狀大ひに之と異なるぞ是非なかりける。

此家の父上先きに失せ給ひけり、世に在はします頃は眞人の御心もいと柔しく行ひ給ふ事も、萬づ淸く在はしけり、されど父上なき後は心のまゝになし給ふ事多く、醉ひて歸り、怒らせ給ふ事も屢々となりぬ、人の罪惡に染む恰かも流水の斷

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

岸を下るが如しと、昔の人は云ひしとぞ、實にさるものにや、何時しか惡風に沈み、過る年の冬頃より、歸り給はぬ夜も多くなりぬ、何處にか泊らせ給ふにやと問へば同僚の許に宴會あり、そのまゝ泊りぬ抔答へ給へり。

去んぬる春なりけり、良人は數日歸り給はざるにより母上も御心を腦ませけり、愈々かゝる事の募るにぞ、親戚の人々打よりて說き聞かせ抔しけるが、未だ聞き入れしことあらず、偶妾がよからぬ行爲なし玉ひぞと云へば、忽ち怒りて大聲叱咤し給ふのみなり、さるにても打すて置き難しとて重ねて云へば女子の輩何をか知らん、長じては良人に從ふをこそよき德ある人とも云ふべけれ、良人に諫言などするは愚かなるの極みのみ、昔しは三千の美女を畜へし例すら異國にはありとぞ、男子豈一婦に操を立てんやと、罵り云はれき、無念何物か之に加へん。

嘗て嫁がざるに先たち、妾の事狀を語り、如何せんと某師に談合ひしにさる事あらば止むを得じ、若良人にして不德不道の人たらんにはそを導き諭してよき道にかへすは女子一世の大事業なり、異國にはかゝる功績を建つる女子多かるを聞く、御身かくなしねと云はれき、今尙其語耳にあり、されど嗚呼如何ともし難し、今日の苦辛。

世のなれる果てとは云へ、心ならぬ事多かるぞうき、うき世憂愁多しとは誰が云ひけん、嗚呼西風未だ偏ねからず、古風陋習の爲めに惱むもの夫れ幾許ぞや、妾の境遇悲慘の事尙繁し、今盡す能はず、今宵感ずる所を畧記するのみ、回顧想思すれば嗚呼自らなせし禍ひ、誰をか怨みん、妾の心の弱くして遂に志を全ふせざりぞ遺憾ある。

心とともに弱り行く此の身、餘命幾程もあらじ、嗚呼妾が身のなれる果て、誰か憐れと見給ふらん、さは云へ妾苦界に沈み、辛勞に腦む世に在る時の事のみ、世を去らば樂しみ盡きず喜び常にあらん、こを望むのみ、若世上の浮沈を問へば妾もと是不幸の身、顧りみて獨り斷腸。

はや夜も明けんとすらん、東天微光を發し、曉鴉遠林に鳴き立つ、まだ消えのこる有明の月、窓の梢にかゝりて冴ゆ、いたく疲れけるにか、心事茫漠たり、只見る涙痕袖に滿つるを、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

理學

○問答二つ

吉田のぶ子

問。磁石は北を指すものでないと、或人が申しましたが、實事ですか。

夫れは何時でも眞北を指さゝぬと云ふことでせう。磁石の指す方角は、大抵眞北より少しく西か東に偏るもので、其度は土地により、年により、又時候によりて、同じからざるのみならず、朝と晩とでさへも差ひます。尤も眞北を指すときもありますが、夫れは全躰から申しませば極て稀です。

問。今春以來頁く見受ますが、賤い簪の丸なぞにしてある珊瑚樹の丸の樣なものは、なんてありますか。

隨分漠とした問ですが、多分人造象牙のことでせう。人造象牙は、樟腦と綿花とで拵えたものです、尤も綿花は强硫酸と强硝酸との混合液の中に一寸浸した、水にてよく洗ひ、之を乾かして「ナイトロ、セリコユース」と申すものに致して用ゐます、其丸の色の赤いのは、顏料を加へたのです。人造象牙は後來隨分應用が廣くなるでありませう、只今でも簪丸ばかりでなく、カラ、カフ（通常ゴム製と唱へ居れり）蝙蝠傘の握り、鈕、櫛なぞ色々之れで拵えたものが澤山あります。佛蘭西では之れで板を製して、船の腹を包まんと申した人もありましたが、所謂水に利あるものは火に利あらずで、何分此物は火の付き易いので其說は實行されませんでした。若しお尋の球が、右の人造象牙であるか、ないか、ご判じなされたくば、其丸を嗅でご覽なさい、少しく樟腦の臭が致しませば、人造象牙です、尚ほ念の爲め之れに火を付けたとき、煤の多い烟と、黄色な炎を揚て盛に燃えて、跡に綿の灰の樣なものを殘こしますれば、其物は人造象牙であつたに相違ありません。

兒籃

金滿家の子と貧乏人の子

ふみ子

此間私しが、招魂社の方へ散步に出掛けました時、公園の中で、八ッか九ッぐらゐの女の子が、三人計り遊んで居升た、其内二人は、金滿家の子と見へ升て、大層美しい衣服を着て居り升たが、あとの一人は、此子供等の、友達とは見へぬま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、極きたない形容をして居り升た、始めは三人とも仲好く鞠つきをしたり、かけッくらをして遊んで居り升たが、いつの間にか、何か氣に逆つた事があつたものと見へて、美しい衣物を着た一人の子供が、外の一人を手招きして片影の方へ行き、

チヨイト花ちやん、こちらへ入らッしやいな、私しはモウあんな穢ない子と遊ぶのは嫌になり升たから、あなたも、モウあの子の傍へ行かないで入らつしやいよ、あなた御存じなの……あの子のお父さんは車曳きなんですよ、そして、チお母さんは、よそのお洗濯をしたりお使に行たりしてお錢を貰ッてるの、わたしの處へも、いつもお洗濯もんはあり升んかッて來るんですよ、ダカラあの穢ない形容を御覽なさい、衣ものは雑巾の樣だし、下駄は雪駄か何か分らない樣に減ッて升う……夫れだのに學校で少し出來ると思ふて何ぞといふとぢきに理屈をいつて、私し達をやり込めるんですもの、憎らしいぢやァあり升んか、モウ〳〵あんな子とわたしは遊ばないの ヨ

といつて、そう〳〵二人でどつかへ行つて仕舞い升た。

私しは誠に斯の如き子供を憎みます、イヽエ誠に憐れなものと思ひ升、何故なれば必竟親の在る間こそ、美しい着物を着せて貰つたり、人に威張つてもゆるさるゝとが出來升が、親の傍を離れて、一本立の人間になると、てうど讒に自分が、人を嘲つたり、罵しつたりした樣に、人からいぢめられる樣になるのです、ですから金滿家の子に生れたからッて決して人を侮つてはなりません、昔からゑらい人には、多く貧乏人の子がなり升。

文學

（東京案山子の家社中）池袋大人批

初冬

市村高彦

ヽふみ石に霜添ふ露のこほりつゝ一夜の中に冬は來にけり
（霜しろく見えそめて朝庭さむき）

評 ふみ石さのみいひては突然にて庭のけしきも出す故に今點者は朝庭さいへる新詞を始て出せり是は古歌に未だ見ずされど點者歌に用る詞の區域の廣きを願ふ故不都合なき詞は用ふる事を點者改革者の權にて許すへし万葉集にも朝川さよみ八田穀は夕川さいへりさらば朝庭さもいふべき也

同　竹内うめ子

ゝ童子（賤の男）が追ひ行く牛の息見えて朝風（霜）寒し白川の里

評 趣向古人の糟粕を求めず新彩の實景をよまれていと面白し點者は追々かゝる實景の出ん事を望む但斧正にて霜の題とすべし

同　日高みつ子

ゝ今朝見れば（朝日さす）淺茅が庭の初しもに（原の霜けふり）小春のさかに見えそめにけり（打かすみつゝ）

評 初霜に冬は見えそめても小春の見ゆるさはいはれず斧正にて一變せり

暮秋　星野ゆう子

ゝ草の葉にはかなく結ぶ（枯れて行淺茅が庭の）白露はくれ行く（わかるゝ）秋のかたみ（なみだ）なるらん

舊都の月　（源平盛衰記）

後徳大寺左大將實定は舊都の月を戀ひわびて入道に暇を乞ひ都へ上り玉ひけり（中畧）宮は居待の月を待詫びて、御簾半ば卷き上げて、御琵琶を遊ばして渡らせ玉ひけるが、山立ち出る月影を、尚や遲しと思ぼしげに、御琵琶をさしおかせ玉ひつゝ、御心を澄させ玉ひけり。源氏宇治の卷に優婆塞の宮の女御、秋の名殘を慕ひかね、明月を待ち出て、琵琶を調べて、通夜心を澄まさせ玉へるに、雲隱れたる月影の、頓て程あく出でけるを、猶堪ずや覺しけむ、撥に招かせ玉まひにき。其夜の月の面影も、今こそ思し召しけれ。大將參りて大床に候はれけり。宮は琵琶をひきさして、撥にてそれへと仰せけり。其御有樣わたりを拂ふて見え玉ふ。互ひに昔今の御物語りあり。大將は、福原の都の住みうき事、語り申して泣かれければ、宮は、平の宮の荒れ行く事仰せ出して、共に御泪に咽ばせ玉ひけり。斯くて夜も甚く更にければ、宮は御琵琶を掻きわはせ玉ひ、秋風樂を引かせ玉ふに、侍從は琴を彈けり。大將は腰より笛を取り出でゝ、平調に音とりつゝ、遙かに之を吹き玉ふ。其後、故鄉の荒れ行く悲しさを、今樣に作りて、歌ひたまふ。

ふるき都を來て見れば。淺茅が原とぞなりにける。
月の光りは限なくて。秋風のみぞ身にはしむ。

と三度歌ひ玉ひければ、宮を始め參らせて、御所中に候ひける女房達、折から哀に覺えて、袖をぞ絞りける。

批評

○日本文典　博文館發兌

落合直文、小中村義象兩氏の合著にて、珍らしく有益なる新書一巻を得たり、之を日本文典と云ふ。文典は文章家を作るものにあらず、然れど亦た文章も文章家を作るものにはあらず。詮ずる所ろは、本然の天才を旨とするは勿論なれども、凡そ文法を知らざるほど文を作るの故障となると多きものはなし、文典を學ぶと極めて切要なりとす。特に我國の如く、文法森然として古へより固く備具しあるに係はらず、其敎授法の宜しきを得ざるによりて何人も殆んど之を等閑視するに至りたる國に於て、其の攻窮尤とも必要なりとす。之が爲めに良書一つも無かりしに當り、乍ちにして此書を得るは、旱烈しき時雨を得たるに異ならず、多少心地あしき落度なきにあらねど、十分の恩澤あるものと謂つべし。細評は異日に譲り此には只だ其紹介を爲す。

撫象子

○昆太利物語

福地源一郎、塚原靖兩氏の譯述にして、上中下三巻に分つ、近頃其下巻を出版し、之にて完備したれば、大方の物評を爲さんと欲す。元書、コンタリニ、フレーミングは、ヂスレリーが希臘伊太利を漫遊せる比ほひ、性來の多血制するに由なく、天稟の詩情泉の如く迸しりて、客舎の窓のうつり〱に一氣呵成したるものと覺ゆ。左れば、ヂスレリーが二十六七才の頃の作にして、其前半、中學大學に於けるの亂暴は大率ね實歷中の材料を點綴せしものと見へ、后半外務次官となりて、國際大談判の席に雄辯を揮ふとは、全く其比の妄想にて在りしなるべし。但し異日ベルリン會議に魯士亞全權公使を叱咤し、立談の間に大英國の威權を万邦の頂に高めたる膽力雄辯は、いみじくも既に此時に纖を現はしける。全躰の趣き、如何にも取とめなく、主人公が多感多僻なるに能似て、景旨千態万狀に變り、讀もて行に、宛から千万の峯巒を足を飛ばせて走り超ゆるが如し。小説と云はば何如にも小説めきたる小説なり、寧ろ半狂せる貴公子が妄想を感溢るゝまゝに書とめたるに似たり、只だ異樣にして面白しと云はんのみ。譯文は流暢にして鶯の囀づるが如く、泉の

水の流るゝが如し、何の苦もなく書ながして絕て譯文の迹を見ず、然れども是れ實に譯文にあらざる也、二氏巧みに筆を弄し、名を譯述と稱して殆んど一新躰の文章を創製したるに外ならず、チスレリーが趣向を、櫻痴、蓼洲の二君、書流しぬと云はん哉。

全篇の道念甚はだ宜しからず、陰險、多畧、を善き事の樣に思はせ、特に婦人の短所を容赦なく暴露して、女をたゞく夜叉の如くに書現はしぬ。年少の男女は讀まぬかた得多かるべし。

○婦女子

博文館より發兌す。曩に廢刊したる「日本之女學」に似て變はる所ろ少なし、巧みに寄せ集めたる手際は感ずべし、拔摘したる出處を明かさぬは、宜しからず。「日本女子の本領復た漸やく壞亂せんとするの兆あり、故に之を再興す」と云ふ。願はくは其主旨の立派なるが如くあれ。

終る一ケ年間の小說界

谷口淸黠

明治二十三年は政治社會の紛擾なるが爲め文學社會は冷々寂寞たる狀況を呈出するならんと想像し居たりしにも係はらず文學社會も例年に比して少しも遜色を顯はさざりしは亦以て我文學社會に名士多きを證明するに足る可し余不肖淺學豈猥りに我文學界に喙を容れ得可けんや已に容れ得ず豈又名家の著作に對して是非優劣を挿み得んや左れど文學の一部たる小說界に至りては余又多少關心する所なきに非らず是余の大膽にも此文を草する所以なり敢而問ふ本年中我國小說家が苦心焦慮して世に顯はせし傑作中何人の何書を以て最優等となすか（但し翻譯戯曲を除く）

思ふに新年第一頭に顯はれし「國民の友」附錄中「舞姬」は筆力精微滴水滴ゝるの趣有りと雖大に人情の圓滿を缺き殘酷に落入り「破魔弓」は構造に失し起稿中趣向を變せし跡有りくと見へ「枯華微笑」は落語に類す是れ皆優等に位するものに非らず。「新著百種」の「松花錄」意高傑なりと雖餘り構造を甚だしくしたる處なきに有らず「芳季」「小野篁」「露小袖」元より優等と成す可きものに非らず「戀染櫻」文斷なりと雖人情を缺き「笑滸命」妙想なきに非されども作者の猥りに筆を弄せし所見ゆ是れ又優等に位するもの有るを見ず。

新作十二番の「勝関」は餘り窮屈に失し「此ぬし」は奇構に失し「教師三昧」は卑猥に落入り「かつら姬」は陳腐に失す是亦優等となすに足らず然らば則玉冠を頭上に荷ふもの抑如何なる小說ぞ。

然らば則美妙齋の「いちご姬」か紅葉の「南無阿彌陀佛」か將思案の「京鹿子」か否是皆一種特別なる婦人の情を寫せしものにして是を以て人情の蘊奥を盡せしものと言ふ可からず然らば露伴子の「奇男兒」か「封じ文」かそも紅葉の「關東五郎」か否是れ亦或る一種の俠客道人幾人を寫せしに止まる然らば讀賣新聞に連載せし紅葉のおぼろ舟か將た日本の文華へ掲載せし露伴の「對髑髏」か否「おぼろ舟」大に人事人情を寫せし點有りと雖卑猥に失し人心を害す「對髑髏」意高なりと雖筆雄健なりと雖然も最優等の玉冠を捲くる能はず然らば紅葉の「新色懺悔」か「夏やせ」か將た學海居士の「楠木」か「征西將軍」か「照天門」かそもく龍溪居士の「浮城物語」か漣の「秋の蝶」か否否否以上の小說傑作は傑作に相違なかる可し左れど一として圓滿なる小說なし是れ余が最優等と成す能はざる所以なり。

抑小說の主眼は人情に在り、然れど作者の着眼頗る高尙ならずんば變じて爲永春水の亞流と成る現時の小說家人情を直寫し曲寫するに巧なるもの少からずと雖然れども着眼の低きに失する處なきに非らず隨て社會を警醒するの器たらずして往々人心を害する事なきに非ず故に余は今其着眼の極めて高尙なるものに玉冠を捧げんと欲するものなり然れども亦着眼の高尙なるの外亦二の要するもの有り何ぞや趣向文章是なり想ふに意高しと雖も其趣向の平々凡々たるは見るに足らず趣向巧なりと雖も着眼の低き時は又賞するに足らず着眼高く趣向巧なりと雖も文章の妙有らざる時は圓滿なる小說と言ふ可からず左れば小說を組成する三個の要素一則着眼の高きと趣向に巧なるものと文章に妙なるものを擧げて以て本年中の最優等を定めざる可からずら然ば則ち是二ッの要素を含有するもの或は他の諸小說に比して上乘なるものを何とかなす曰く露伴子の「一口劍」なり鷗外漁史の「うたかたの記」なり。

問答

可愛子

問。雲峰子、撫象子の兩氏は何處の人ですか。
答。雲峰子は群馬縣の人で、撫象子は兵庫縣の人です。

（南海漁夫）

問。懦弱な青年が讀んで奮ふやうな書物があらばお明し下されたく候

（僻隅一少年）

答。いろ〳〵ありませうが、古くからあるものでは、中村敬宇先生の西國立志編これは大槪御存じでせう、近年の刊行物では、德富猪一郎氏の手に成た新日本の青年、松村介石氏の著はした立志の礎、其他格武電（コブデン）、武電土（ブライト）、格倫窪（クロムエル）、倫古龍（リンコルン）、淸敎徒記事、敎法改革路得（ルーテル）傳、世界百傑傳などでせう、又よくしらべて後にお答へ申すとに致しませう。

問。妾は最愛の子がありますが、近頃病の床に臥して、漸々衰弱致し、食物を食べなくて困ります、食べないから、益々瘦衰へます、ソレ故妾は大層心配し、夫さも、醫師さも、いろ〳〵相談して、宊ろ〳〵、諭したり、すかしたり、果は願ふやうにして、食物を勸めても、ドウしても喉へ這入らないさ云つて居ります、夫さ妾は勿論、醫師も之には殆んご困り切て仕舞ますが、ドウシタラ食物を食べるやうになりませうか、御迷惑の質問でせうが、御答へ下さらば幸に存じます。

答。それは誠にお困りでせう、お醫者樣さへ困るさいふとですから、記者などに決してよいお答へは出來ますまい、併し私には自身がソウいふ病者になつた經驗が御座います、私が十三四才の時でした、大層に病重くて、何でも食べられず五日ばかりも絕食でした、六日目でしたが、母は粥の湯を小さな茶碗に盛り來りて、ソウ食べないでは惡ひ、少しだから之を飮むがよいさいつて勸めました、ケレド少しも……手に取るとさへ、厭でした、其時父が來て、私を叱つて、ナゼそう我儘だ、食物を食べなければ、病氣の治らぬ先きに、身躰が衰弱して死んで仕舞ふ、藥を飮む積りさ思つたら、其位のものゝ飮めない筈はない、さ申しました、……藥を飮む積り……此一言よて、私は悟り、勇氣を鼓舞して、其粥の湯を飮みました、それから少しづゝ、藥を飮む氣になつて、飮食しました、それが爲め、だん〳〵勢が附て來て、大病でしたが、四十日餘り經て、やうやく全快致しました、御子息も食物さ思ておいでゝすから食べられないのでせう藥さ思つたなら、少しづゝも食物の食べられないとはありますまいさ存じます、右は私の經驗ですが、御參考までに申し上げます。

寄書

吉野の朝の末路を詠す

旭光千代

あさましや世はかり雖さみたれ行き千代万代の末までも持ち傳へなん我國の日本魂てふものもいつしか消えて今日の日は利慾の羈に己が身を取縛られて其道を失ひつ又其分を忘れ果てしぞうたてけれされは子は親を忘れつ又臣は君を無みする有樣はこれぞこれ世にいひつたふ惡鬼羅刹の棲處かやかくては昔て國人が唐に使ひしける時之れ日の本の君子國さたゝへられしも今は早や一塲の夢さなり果てゝきのふにかはる今日の瀬を思ひまわせは袖ぬるゝ涙の露ぞおく萩の葉風身にしむ秋の暮哀れいやます雁か音の聲もくだけて鳴き渡る雲井のよそに聳ゆなる姿淸き富士か嶺もいつか寃界の汚れを帶びまた外つ國に並びなき眺めの花の櫻木がにはうあらしの嵐山峯に白雲立くらし咲きそひて行く花こそは浮世の春にさそはれて仇なる色ぞまさり行くこれをながめん人や誰れ即ち古今の大賊臣足利將軍尊氏義詮特にもすぐれて幾满が驕奢を盡す花の寵愛深きたをやめ等あまたかたへに侍らせつ打群れたちていたつらに花折りかざし或は又觴流るゝ谷水にかずの杯ながしてぞ花に心の浮れ行きそこさもしらずあくがるゝ明日も斯くてやこれはいざ昨日も今日も遊びくらし家路わするゝ太平の御遊さたゝう諸人の心の中はいかに侍あらむ實にめさましや我れさても天運一たび身の上に回り來さはさいえばへに表は威風に靡くありさるからに花の都も幾度か兵火に燒かれ戰の修羅の巷さなりし雖さも華奢を好む義满が黄金の山を散らしてぞ以前にまさる市街の中にも目立つ將軍の花の御所は其結構綺麗を極め華奢を盡くし一たび之を見たらんには眼眩めく許りなり上の人此の如くなれは之を見習ふ諸大名市人輩に至るまで金銀あまた打捨てゝ家居衣服を飾るなるあゝ世は澆季さなりはてつ不忠の賊はいやましに榮ゆるなるに正統の御門や忠義の者共は秋の嵯峨野に立芦の殘るもかなしかれ〳〵になりゆきたるぞ是非もなき一天万乘の御方さへ吉野の奥に畏くも宮居しつらひ住み玉ふ實にも甲斐なき世の人の賴みかだなきを如何にせん來る春每に四方の山尾上の花は開けさも開くよしなき御運の程ながめてくらす盛りの花に嵐をかこつ大宮人夜長き空にもゝ敷の岩多き庭に御垣守衛士のたく火を見るにつけそゞろに昔忍ばれてあじきなき世を今更に恨みんともなくにいつかは御運の開けきて稜威かゞやく朝日影明くる雲井に霞こめ敵の園も厄難もさくる氷の山谷に千代を壽く鶯の鳥の初音の長閑けしなけふ新玉の春の色を鄙も都もおしなべて同じ光に仰きつゝ千歲を籠めて君か代を祝ひ歌はん其時の一さ日も早く來れかし、

月夜これのみ謳歌しつ又其事の空頼さ成り果てんと思ひ出で又も涙に袖しぼろ濕りがちなる五月空降りみ降らすみ晴れやらぬ歎にいさも明けやすき遠方の山邊た一聲はこれぞ此世の思ひ出さ鳴きすてゝ行く杜鵑之を聞きつる人々の心の中やいかならむあはれさいふもおろかなりけり。

時事

○議會内の信徒眠れる乎

今こそ諸君が喝破大叫すべきの時なれ。權勢に懼るゝとあく、名利に誘はるゝとあく、失敗に落胆するとなく、只だ義を見て勇進するは實に諸君が天職にあらずや。吾人試みに議會内の宗教信徒を列擧せん。

基督教徒

中島信行。島田三郞。片岡健吉。湯淺二郞。

加藤勝彌。櫻井錠太郞。江原素六。長屋忠明。

下飯坂權三郞。立石岐。野口褧。中村榮助。

青木退藏。岡部長職。三好退藏。

佛教信徒

堀善證。天野若圓。菅了法。金尾稜嚴。

赤川龜。中川與長。西五辻文仲。杉渓言長。

○窮民救助法

特別審査委員が修正も思はしからず、彼の分にては吾人も不同意なり。寧ろ其地中に葬られたるとを祝す。

○婦女子と政社集會法

今の政社集會法には、不都合の廉少なからず、伊藤大八氏等は之を改正せんとを欲し、衆議院に改正案を提出しぬ。末廣重恭氏代りて其理由を辨ずるとき、婦女子に參會を許すの改正を論じて云く、

第三は女子で御座ります、是まての集會條例を見るに、女子の政談集會に臨むとを禁じたのは、本年七月頒布した集會及び政社法は何の必要あつてか、女子さいふものを加へられた、定めて此の論點は婦人は政治上に不適當なものである。不適當であるから之に政治上の事を聞かしむべからずさいふ論點から來たのであるか知らぬが、元來今日婦人の政治上に不適當なりさいふものは、多年政治上に關係をせぬ習慣さ遺傳に基いたものである、從來世の中が進歩したら、婦人が政治上に最も必要なる資格を生ずるかも知れないさ思ふ、然からば婦人が政治上に不適當ならば、尙以て政治思想を養ふことの出來るやうに、導かればならぬ譯ではありませぬか、又た一方の論者は婦人を茲に禁ずるのは、元來婦人は選擧權、被選擧權さ云ふものがない、一國の法律に於て政權を與へぬからさ云ふ論もありませうが、斯く云ふさ世の中の政談集會に臨むものは、選擧權、被選擧權を有つたものであつて、此の政權のないものは、一切政治の集會に臨むことが出來ぬさいふ法令を、設くるやうな不都合を生じ、窮屈千万なるさ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ころの世の中にならればなるまいと思ひます、元來世の中の婦人が十分の政治思想を養ふて、其夫を助けたときは社會の爲めに甚だこれが利益あるものと考ふる、今日西洋諸國に於て政治の發達を致し、政治の滑に運動するのは、畢竟西洋の婦人の政治思想があつて、男子を助くるの力でありませう、若し西洋婦人にして政治思想がなかつたときは、恐らくは此の議會の有樣に於ても、今日までの進歩をするこ云ふとは出來まいと考へます、隨分歐羅巴人でも、婦人を政治上の集會に臨ましむるのは惡るい、議院の傍聽などに婦人を出すと、男子はそれが爲めに心を奪はれて、說を曲げるといふ說もありますけれども、是は婦人崇拜の行はれる西洋の說で、日本に於て婦人が何十人政談の席に臨んださて、それが爲に男子の議論の變るといふとはメッタにあるまいと思ひますから、此等も要らぬところのものである、元來政府に於ても婦人に交際をせしめればならぬ、世の中に出さればならぬと云ふて、舞踏會といふて婦人の交際を勸めながら、一方に於て婦人の政治上の集會に臨むとを禁じたるは、自家撞着も亦甚しいと申さればなるまいと思ふ、

咄何等の怪報ぞ

川合信水

風聞は吾人の耳に報じて曰く、衆議院豫算委員の中に於て五千圓の賄賂を取りたるものあり、又商法延期、商法斷行の爭に於て、賄賂を取りたるものありと、又新聞は吾人の目に知らせて曰く、議員三十餘名、烏森町の湖月樓に登り、藝妓十三四名を聘し、飮み、歌ひ、戯れ、踊り、狂ひ、騒ぎて後、いよいよ勘定といふに至り、三十餘名、嚢中無一物、威張りし人今は樓主に事情を述べ、訴へ、勘定をば、歳費を請取る迄延して貰ふとになし、所謂藝妓への祝儀は議員自筆の纏頭劵を發し、以て他日正金と引換ることになし、漸やくにして歸りたりと。咄何等の怪報ぞ、此事果して信乎、僞乎、余輩之を知らずと雖も、堂々たる日本の代議士にして、斯かる風聞を立てらるゝこと、豈大不面目の事ならずや、嗚呼撰擧區民に對し、日本人民に對して、抑も亦我が聖明なる、仁慈なる 天皇陛下に對し奉りて、何の面目かある、陛下は常に御心を、日本に、人民に、國會に、傾けさせ給ふて、兩議院の議事錄をも、よく見そなはせ給ふと聞くに、嗚呼々々……余輩は胸迫りて言ふと能はず、紅淚滴々雨となりて落つ。

○婦人の監獄取締

女監には婦人の取締を用ふべしと云ふは、尤もの理ありて扨て行はるゝと至つて遲く、米の合衆國などにては、今尚ほ彼此の異論あり。然るに島根縣に於ては、斷然此制を可とし、

義に富岡たけ、住田あきの二夫人を採用し、此度亦た、中村てつ、山本ゑいの二女史を任用せり。而して月俸は皆各六圓ありと云ふ。監獄評論之を評して云はく、

看守長若は看守の妻を以て女監取締に任ずるは極めて良制たると論を俟たず聞く白耳儀の如きは女監獄取締は看守の妻に限ることとす就ては小監獄にして女囚僅少なる所には往々女監獄取締を備す男子をして之が戒護を爲さしむる向きもあるやに聞く斯るは嶋根縣白耳儀等の如く監獄官の妻に女監取締を命し置くに於ては大好都合なるべしと思はる元來女子の撿身其他共決して男子に委すへきにあらさるは道義上固より當然のことなれば苟も一人の女人たりとも女子を取扱ふ上に於ては必す監獄改良上大緊急のことなりと信す。

○鳥尾將軍

貴族院は意外に活潑なり、然るに鳥尾將軍は又意外にも辭職したり。但し此等の事元來全く意外の事のみにはあらず。

○豫算委員

本年の帝國議會に於ける最大最緊要の議案は、豫算の事なり。然るに今や其調査する所ろ、奇々怪々、嘔吐するも厭足らざるの事のみ滿てり。思へ諸君、上塗風の改革は何の用にも立たず、政治界到底遠高偉大なる改革者出でずんはある可からず。

○廢娼バザール

有志婦人諸氏が淺からぬ盡力により、年末忙雜の折柄なるに、來會者殊の外多く、意外の收益ありぬと聞く。當日銀坐會館の光景は、他の浮きたわれたる持なしに非ず、受持の婦人皆な毅然として立ち、愛相を以て強いて賣るに非ず、熱心を以て人を動かし、錢なきの書生も慷慨して財囊を拂ひたるもの多し。取わけ感じたるは、「矯風せんべい」と云ふもの、賣出なりき、千枚一々矯風上の經語をつじうらとして挿入し、開き見て無限の感慨あらしめたると、就中吾人を動かしぬ。

○廢娼の聲四方に反響す（其二）

岡山縣會は去廿二日、向ふ五ヶ年にて、公娼營業を停止することに可決したり。又、國會へ對する廢娼建議は、群馬縣より、岡山縣より、新潟縣より、山梨縣より、大坂府より、岐阜縣より、到來し、其他續々提出準備中なり。

○死を決して廢娼建議を爲んとす

聞く、千葉縣會議員某氏は、肺患甚はだしく余程の危篤なるが、廢娼建議の爲め絶叫し肺を破りて死するは本懷なりとて、特に建議せられんとす。而して過日之れが爲め家を出で途中

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

にて倒れ一旦歸宅す、左れど其志望些かも減ぜず、追日又々出席し議場にて吐血し死に至るも叫ぶことを止めじと、決心せるよし。

○實業家政談演說會　藏長子

實業家が公會を開きて政談すとは近來健氣の事に思はれ、余も半日の閑を偸んで傍聽しぬ、時は去る十三日にして所は芝の彌生館なりき。辨士は定めて新顔ならんと思ひの外皆聞き慣れたる政治家にして先々雄辨なりと聞き受けたり。只惜むらくは言語動作多くは俳優的にして、甚だ誇大之を女子が一言一泣して人の赤心に訴ふると孰れぞ。凡そ眞正の雄辨は言作の活潑勇壯あるにあらずして心意の硬きにあり。

○宇宙神教の使節　同

米國の神學博士ヂ、エル、ペリン氏は去る十四日飯田町に新築せる其中央會堂に於て演說されたり其演題は「日本人民に對する宇宙神教の使節」にして通譯者は吉村秀藏氏なり其說く所別に耳新しき事なし只三位一躰に同意せぬと云ふまでにて其他は通常キリスト教の說く所と大差なし會堂の模樣禮拜の有樣是亦差たる相違なし只少しく奇に感じたるは「オルガン」の代りに「ピヤノ」を用ひし事のみなり。

新誌

可愛子

●時事新報　の國會の前途は、いよ〳〵二十三日に至りて完結せり、曰く我日本の國會は明治二十三年に形體の成を告げたりと雖も、其生誕は二十三年にあらずして、明治元年王政維新の時に在り、其維新の時に生誕したるは、德川政府の治世二百五十餘年の素因に胚胎して、嘉永の開國これが誘因となり、西洋文明の輸入以て分娩を促し、事の由來久しくして胎內の發育十分に熟し、分娩も亦時を得たるものなれば、其生見たる國會の健康にして長壽萬々歲たる可きは、識者の診察に於て違ふことなかるべしと、淺見なる人、及び外國の人にして之を見ば、定めて心に釋然たるものあるべし、時事翁今度の說法、時節柄極めて有効なるべし。

●國民新聞　は廿二日の紙上に於て、豫算委員は何が故に躊躇するかと題し、委員の生ぬるきを責め、立憲自由黨、及び改進黨が猛然として勇氣を出せしを責め、而して躊躇逡巡、曖昧姑息の論者に向て、徒らに圓滑々々と唱ふる勿れ、議會をして卑屈議會たらしむる勿れと勸告したり、

●東京日々新聞　は十八日より廿三日に跨りて、政府は一大英斷を行はざるべからずとの題にて、政府は堪へ難きに堪へ、忍ぶべからざるを忍びて、政費節減と、地租輕減とをなすべしと勸告したり、其論頗る緻密なり。

●改進新聞　は十八日の紙上に於て、日本をして賣淫國たらしむる勿れと題し、悲んで訴へ、激して論じたり、ユダヤが世界の金貸國となり、支那が世界の勞働國となりたる如く、日本が世界の賣淫國となるに至らば、我が國は他より輕侮と嘲弄とを濺ぎ掛けられんのみ、今若し日本淫賣女が密に外國に行くを禁絕し得ば、其國權擴張に効能ある、十艘の甲鉄艦を製造するに優らんといふに至りては、余輩が大に同感情を表する所なり、府下の新聞皆多くは、國會の記事にのみ餘念なき折、彼れ能く此問題を論ず、世人願くは輕々に讀過することなく此愛らしき日本の爲めに、これが矯正策を講ぜよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

通信

可愛子編

山梨縣通信

●山梨英和女學校　甲府太田町なる同校は目下生徒の數二十四名（内二十二名は寄宿）其年齢十一歳より十六歳に至る。校長はミス、ウヰントミユート孃教師はミスプレストンは孃金子せん子前田しづ子小笠原きん子鈴木一男氏平田夯彥氏にして何れも熱心に教授の任に當れり。文學會は校内にあり尚小さしと雖も追々盛ならんとする見込なり。當校は明治二十二年五月開校し尤も新らしけれども其德育の基督教主義にして其薫陶のよく行き屆くが故に將來頗る望あり生徒の中洗禮を受けて信者となりしものは二名なれども何れの生徒も皆無邪氣の處女にして都會の女生徒が東に西に學校を轉じ所謂スレカラシとなりたるものゝ比にあらざれば其教育其誘導すべて能く行き渡りて教師も爲めに張り合よく益々親切に熱心に教育するやうになるなりと云ふ。

●尋常師範學校女子部　生徒は現今十三人あり教師は現員十九人女子にして之に關係せるものは山田よね子竹澤せん子淺岡きく子小松しか子原たけ子小田切うらの子六名なり。干涉主義の甚しき爲めに振はざるは甚だ歎かはしき事なり。

●小學校女教師　女子にして教員免許狀を有せるもの十六人外に授業生となれるもの十一人あり。

●女兒の就學者　就學せる兒童の數四万三千八百三十三人其中男三万二千五百二十五人女一万千三百八人即ち男七分五厘強に女二分六厘弱の比例なり男女の就學に斯の如き逕庭あるは其原因重もに女子をして農桑製絹等の業を執らしむると嬰兒の保傳家務の保助をなさしむるとにありと云ふ。

大阪通信

油谷治良

●女子の教育家　大阪市内女子にして公立學校にて教育に從事するものは幼稚園（保姆二十人助手十八人）小學校保育科（保姆十九人助手三十九人）尋常小學校（教員三十九人）高等小學校（教員二人授業生四人）なり。

●大阪婦人會　は一月二日を期して廢娼演說をなさんと企て居れり。

千葉縣通信

●女子教育　は一般不振の姿なり小學校にては男生八分に女生二分の割合なり。

●產婆學校　高梨みつ子の設立せる同校は目下愈隆盛なり去月卒業せるもの本科生一名速成科生二名にして何れも頃日內務省產婆試驗を受け及第せり。

●尋常師範學校女子部生徒　にして不品行の者ありとて當地の新聞に書き立てしとありてより同校幹事は一種の帶を製し他出の時他の女子と容易に區別せしめ以て濡衣を着せらるゝ等の憂なからしめんとせり。

高知縣通信

●尋常中學校の校長　福井彥次郎氏は辭職して理學士大石保吉氏今校長の任に當れり。

●中學校の女子部　は四年級（第一級）にパイヨー夫人一週二度づゝ會話を教ゆるのみにして他の級は皆英語の教授日本人の擔當なり故に生徒は英語に付ては力薄し。

●英和女學校　は近日貝地を擇んで新築をなす由過日米國婦人ラパッソン孃渡來して教授の任に當れり又桑名淳氏は和漢學の教授を擔當せり。

●英和女學校鳴嚶會　は文章練習の目的を以て教員生徒の結合より成るものなり近日當會より「室の梅」と題する雜誌（非賣品）を發刊するよし。

●婦人會　は此度職業部を置き裁縫を教授し又諸方よりの依賴を受け其賃金を以て同會の維持費となさんとの相談にて不日着手する由。

三重縣通信

●女子教育　は未だ普及せず女子の爲めに高等なる學科を教ゆる所なきは遺憾なり。

●養止學會　は津市東堀校町にあり本年五月河村寬氏の發起にかゝる當學會は養止高等小學校卒業生及び都合ありて業を卒ふる能はざるものゝ爲めに設けたるものにして現今生徒十餘名あり教科は重に裁縫和文漢文習字和歌等にして去る十四日第一回の卒業證書授與式ありたり。

●幼稚園　は去る廿一年十一月創立目下幼兒三十餘名創立以來入園せしもの凡七十名保姆二名之を保育す一人は溫和なる老夫人にして一人は女子師範學校の卒業生なり本園にては兼てより保姆見習生を養成す卒業せしもの六名何れも各地小學校の教員となれり現今修業中のもの一名。

●師範學校女子部　は今ま無し明治十五年の頃とか三名の女生あり二名卒業して東京女子師範學校に入りしと聞く。

●女教員　は當市高等小學校に二名田宮きくえ子と外一名なり尋常師範學校に奉職するものは三名あり。

●師範學校　にては每年講習生を募集す男女とも。

●英語會　都合の爲め閉會中なりし同會は不日開會男子部はホワイト教師女子部はガーデナー教師教授を擔當せらるといふ。

女報

可愛子編

●產婆開業試驗及第者　東京府廳に於て擧行したる、本年第二期產婆開業試驗に及第し、免狀を下附せられし婦人は、東京府（三十二人）地方（二十七人）合計（五十九人）なりといふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●英人英籍を脫して日本婦人と婚す　橫濱在留の英國人エツチエ、ソロモン氏は、英國臣民としては、日本婦人と結婚する能はざるより、曩の日斷然英國臣民の籍を抛擲し、同港英町の星野くにと結婚することになり、神奈川縣廳に願ひ出でたれば、內務省の稟議を經たる上、此旨許可になりたり、同氏は尙日本に入籍の手續をなさゞれば、未だ日本臣民の資格あらずといふ。

●一女子八丈島の殖產を謀る　八丈嶋に、小嶋春子といへる婦人あり、天產物に富める同嶋にして、殖產事業の振はざるを憂ひ、有力者の助けを得て、大に計る所あらんとて、先頃出京し、先づ日本橋中洲町なる、茨城縣人山田喜平氏に謀りたるに、氏も篤と實況を聽きたる上一臂の力を添へんことを諾したりとぞ。

●小鹿嶋筆子　は華族女學校教課授業囑托にて、一ヶ年金三百六十圓下賜せらるゝ旨、去る二十二日辭令ありたり。

●新刊の東京婦人矯風雜誌　第三十二號には、同會長淺井さく女史が、（帝國貴族衆議院議員各位に請願す）と題せる、沈痛適切なる一篇の文章を截す、同號は六百部餘も增刷して、兩議院議員六百へ、漏さず送呈致したりといふ。

●妓樓に遊ぶ者　京都に於て、或るクリスチアンの調査する所なりといふを聞くに、最も多く妓樓に遊ぶ者は、醫學者と、二十圓內外の給料を取る官吏と、小學教員となりと、然し近來教員の遊ぶ者は大に減ぜし由。

●廢娼說と遊廓移轉論　十六日の名古屋縣會に於ては、廢娼說少數にて消滅せり、併し當地四ヶ所の遊廓を市外に移轉することには贊成者多數にて、十七日より此事に付き會議を開きしと聞きぬ。

●廢娼論の否決　十七日、熊本縣會に於ては、廢娼論を否決したり。

●不潔物は洛外に掃き出すべし　十八日、京都市部會は、遊廓及び娼妓を京都の町外れに移轉せしむることに決したり、之が爲め娼妓移轉の建議者大澤善助氏は、知事に出願の歸途要擊に遇ひたり、遊廓の者共は尙十年間現在の儘遊廓据置の事を知事に出願する事に決しぬ。

●不潔營業者の頭痛會議　廢娼論の勢烈火の草原を燒くが如く、府縣より府縣に、地方より地方に傳播し、爲めに貸座敷營業者の頭痛一と方ならず、昨今大阪始め各地方の同業者は、東京府下に集りて、種々協議中なりといふ。

●存娼建議　神奈川縣の不潔營業者は、同縣知事に向ひて、竊に縣會が議決せし廢娼建議を奈川せざるやう建議する由。

●二十五日の國會と廢娼建議　廿五日の國會には、群馬、崎玉、山梨、三縣より廢娼建議書出でたりしが、何れも、未だ議場に現はるゝに及ばずして、議會閉づ。

週報

●官令　二十二日來る廿四年の新年式定まる。

●宮庭　十八日天皇陛下赤坂離宮へ行幸あらせられ打球天覽遊ばさる●十九日皇后陛下華族女學校へ行啓。

●政治　十七日靑木外務大臣衆議院に於て演說す●十八日立憲自由黨常議員會開く●同日厚生館に外交演說會あり●十九日後藤遞信大臣靑木外務大臣芳川文部大臣陸奧農商務大臣貴族院に出席す●二十日貴族院特別委員會を開く●二十一日國民自由黨の結黨式あり●同日衆議院副議長津田眞道氏及び議員末松三郎氏能ゝ學會に於て演說す●二十二日板垣伯自由黨常議員を辭す●同日鳥尾將軍貴族院の議員を辭す、同日貴族院に於て商法施行延期に決す。

●經濟　二十一日東海道程ヶ谷驛に電信局を設く。

品名	十二月廿四日
白米（一円に付）	
一等米	一、〇二（斗升合）
二等米	一、〇四
三等米	一、〇八
四等米	一、一五
五等米	一、二一
正米（一円に付）	
肥後米	一、三（斗升合）
越後米	一、五一
尾張米	一、五二
美濃米	一、五一
忍領米	一、四七
雜穀（一円に付）	
本貫大麥	二、五三（斗升合）
上州小麥	一、七五
梅澤大豆	二、二〇
青柳大豆	二、一〇
吟小豆	一、五五
白胡麻	一、二二
黒胡麻	一、五五
鹽（一円に付）	
赤穗	三、一〇（斗升合）
大塊	三、二〇
本齋	五、五〇
醬油（一円に付）	
最上	七、九九
極上	九三
上物	一、三五
中物	一、九〇
下物	二、三〇
乾海苔（百枚に付）	
洲崎極上	九、〇〇（錢厘）
大森同	八、五〇
深川同	九、〇〇
潮田同	六、五〇
上總同	五、五〇

品名	十二月廿四日
絹糸（一円に付）	
本練花色上	二五、〇〇（目）
同並	二九、〇〇
色物上々	三三、〇〇
同並	二九、〇〇
赤白上々	三三、五〇
同並	二八、〇〇
延糸上々	二〇、五〇
同並	三〇、〇〇
芥子糸色ト	二七、〇〇
同並	三四、五〇
藤色上々	三三、〇〇
同並	二九、〇〇
色物太練	二五、〇〇
羽二重糸	三三、〇〇
吳服（一反に付）	
御召縮緬上	九、〇〇（円）
糸織極上	七、三〇
一樂織上	九、〇〇
結城紬上	五、八〇
節糸織上	五、八〇
本八丈極上	六、八〇
琉球紬ト	五、八〇
銘仙上	三、八〇
奉書紬上	四、五〇
七々子稀物	一〇、〇〇
白縮緬上々	一二、五〇
繻珍織上	二五、〇〇
本織上	一五、〇〇
唐繻子上	一〇、五〇
博多織上	一〇、五〇
練仙臺極上	九、二〇
嘉平治平	二、〇〇
五仙平極上	五、三〇
花色絹上	三、七五
本紅絹上	三、四〇

品名	十二月廿四日
毛糸（百斤に付）	
鶴判上	一〇、〇〇（円）
同染分	一〇、〇〇
同中細	一一、五〇
同極細	一一、五〇
靴下用極上	一三、〇〇
綿糸（一円に付）	
坂上銘大入	七、九[illegible]（円）
京丹大入	八、一五
坂丹大入	八、二五
三州文庫入	八、八〇
地綿文庫入	九、〇〇
石油（一箱に付）	
チヤスタ	一、七八（円）
ホーキ	一、六八
デボース	一、六七
ロシヤ	一、六三
水油（一樽に付）	
地水	八、二〇（円）
胡麻油	九、二〇
荏油	一〇、三〇
桐油	六、八〇
製茶（一貫目に付）	
山城江州大頭	一、九〇（円）
同小頭	一、六〇
狭山大頭	一、七五
極上骨屑	七八
木綿（一円に付）	
玉鶴	三、三五（円）
綾鶴	三、六五
日ノ出鶴	三、九五
稲岡	三、三三
若柳	三、〇三
白梅	三、八〇
古新	三、〇〇
改メ	三、四〇

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●十二月十一日發行 **速記彙報第廿五册**には英國各都布に於る

女速記生に關する最新の統計表 **女學雑誌社速記員安藤たね子女史の履歴**を掲載す

○速記彙報 每月一回發 一册八錢 無遞送料●

東京神田裏神保町一番地 速記彙報發行所

私立 **明治女學校**内に新設する**職業科**

本校内に新たに女子職業部を設け、本科生は二年にて、本科は半年にて、兼修生は毎日半日づゝ、修業二年にて卒業し、裁縫、編物、縫箔、陶器畫、作花、簿記筭算等の各種に上達することを得しむ。來年一月より開業可致に付、志願の人は本年中に申込わるべく、規則書入用の人は二錢切手封入通知あれ。

東京下六番町六番地 **明治女學校**

殊に **女學生** **診察** 毎日午前 外神田和泉橋通松永町廿三番地 **渡邊泰** を優待し、別室を設け、尤も信切に診察すべし、尚學業中餘資なき人の爲に自由治療す。

附錄女學（第一册） 女學雑誌二百四十二號附錄

廢娼建議の文 小島官吾

文學會の序文（英文） 若松賤子

小夜中 磯貝雲峯

右附錄直接意の諸君に呈す。廢娼建議文は周密精細にして且つ文章雄麗懃勃、廢娼論文數多あるうち、未だ如此く平易にして且つ感深き者あるを見ず。若松女史の英文は或文學會年會の祝詞にして二年前の舊作に係ると雖ども、爾來居留人の間に嘖々として評判極めて高きものなれば、所望の人多きにより茲に揭げ、女學生英文の一標本とす。雲峯子の新躰詩は自から一家獨得の妙あり、此篇は分けて意を凝め、感慨を溢らしたれば、朗吟の際涙禁じがたきを覺ゆ。

絶版中催促頻々。

校正印刷に手間どれ延引仕候。

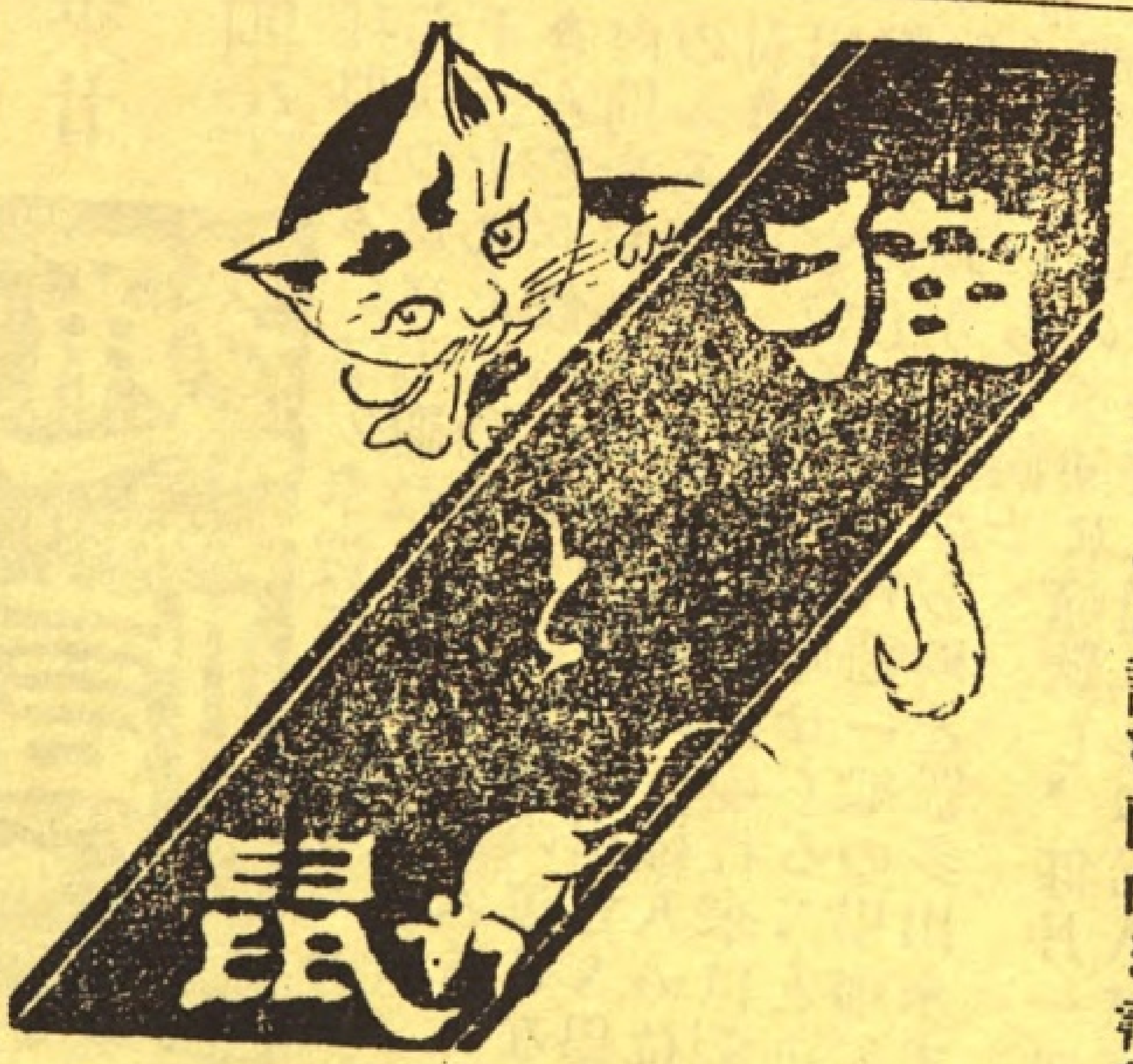
第三版

百人一首講義

いよいよ來廿二日より發賣候。

速に御申込あれ。

但し**無代價**にて右百人一首講義を購求せんとするものは其法なきにあらず即はち女學雑誌一年分前金を拂込にあり。



クリスマス 最良の遺物用

クリスマスも既に近くなり、正月も早や遠からず、子供衆又は家内にて樂しみに讀む面白き書物を作らんとて、左の味ひ深き敎訓のおはなしを出版す。

一册　七錢　郵税二錢

十册　一割引

五十册以上　二割引

百册以上　二割半引

子供が讀みて面白く、御婦人が讀みて爲になり、哲學者が讀みて感服する趣向なり。繪は彩色にて、文章は流麗丸を轉ずるが如し。遺物には最上なり。

東京市麴町區下六番町六番地

女學雑誌社

女學生

每月一回第七號　一冊金六錢

社　團欒
士氣、霜氣寒き……天和子
女學生を戒むる文……みきな子
荒船山の晩秋……白放子
小督をよめる……金光子
黯澹點々……暗光子
（後悔、女の裏面、せつなし）
まことのふみ……あまに
論　叢　說
詩人たれ武士たれ……春風女史
十五城は物かは……秋野すゝき
寶山、是れ讀禮……金波女史
詞　流　麗
茸狩る山の秋の夢……稻垣愛子
猫が洞の秋遊び……吉田すは子
楓が岡の大活讃……南部貞子
秋の夕……森田千子
秋の夜……小林たえ子
偶々水害をきく……栗原優子
古　錦　襴
雛衣の述懷……曲亭馬琴
月奪花……蜀山人
常盤坐帳の序……十返舍一九
九仙山……近松門左衛門
新　衣　裳
返魂香＝花紫の段……櫻山人
到　來　書
女學生二、三、四、五、六號の評……川合信水
眞人不眞人……木內桂子
武　凛　談
門前の瓦、　松風の氣合ひ、
交　々　詢
本邦の四天王、男のおもしろい、北胡變名、
にじむ紙、思ひ煩ひ
智　惠　囊……考へもの

編輯人　星野愼之輔

來廿四年

通信女學

新募申込

拜啓益々御清安奉賀候國家の爲め重任に當り日夜御黽勉作陰邦民の爲に鳴謝致居事に候陳者近年女子敎育頓かに進歩し二十三十にして初めて女學校に入る人も多く有之の勢ひ喜ばしきことと存候然るに既に一家の妻となり特に多忙多用の良人を內助せらるゝの令閨諸君は出でゝ學び給ふの暇まも固より少きのころ、世は息まず開化し婦人の位地著じるしく進歩致候に付きては、今後婦人同性の往來は彌よ自由に奈り女性が外に出でゝ宴會交際に周旋せらるゝと亦彌よ頻繁と可相成歟其際賢夫人にして萬一普通一般の學識に欠くる如きと有之時は談話應接の砌り面白からぬと數多出來すべくと密かに掛念するものも少からず候。

弊社此等の不便に痛歎し、毎月一回通信女學講義錄と云へるを出版し、學校に通はれぬ婦人は家に居て獨學する樣、當今の女が心得べき學問を悉く講義し、一日四枚宛讀む時は家政、育兒、看病、衛生、生理、漢學、和學、英學、歌、百人一首講義、作文、算術、動植、理化學、萬國及日本の歷史、並に地理、等を一年にて滯りなく卒業し女學雜誌社の卒業證書を受くるの規則を設け講義錄の文章は分り易き上に一々假名を附け、且つ繪を入れ、尚不明瞭の所は質問に答へ專ら信切を旨とし、學校に於て直ちに敎授を受くるよりも一層便利多く致候、毎月々謝卅二錢御申込の人には二百枚餘の講義錄を月々送ることにて、來年一月新たに入學し其第一卷より順次に稽古することに候。

右の主旨何卒御賞玩被下弊社の精神御吹聽の程偏へに奉委賴候、凡賢夫人家に居て內を修むるの暇々、當今の女學悉皆講習の上に內助の德一際にして所謂烈夫賢妻共に國事に盡力するの美觀國中に充滿するに至らば邦家の幸福至大と存じ候敬白

右通信女學講義錄壹册三十二錢（全國無郵稅）每月十日出版。半年前金壹圓八拾錢。一年前金三圓五拾錢。女學雜誌と併せ購讀の人には壹割を減す。

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

日本未曾有
洋服形紙

●價一枚十錢ヨリ壹組六十錢 郵税貳錢

此形紙ハ方今歐米ニ其名博スル新法式ニ由リ裁斷ス●誰デモ容易ク洋服ヲ裁チ得ル●從前ノ分ヨリ裂地ヲ減ス●格好ハ歐米流行ノ新形●其姿書の寫眞ヲ添フ●洋服商●仕立匠●女學校●裁縫學校等ニハ不可欠要品●詳細書望ムカハ郵券二錢送ルヘシ

●裁斷 裂地持參ニテ裁テ斗ノ依賴ニ應ス

日曜日大祭日及夜分休業

●新法裁斷 洋服調進 ハ本館新法式裁斷ト精練ナル縫手ニヨリ調製ス他ノ裁斷法ト異處多シ其著シキハ一切假着ヲ要セスシテ身躰ニ適合セシム

●羅紗及洋服附屬品幷裁縫ニ關スル一切ノ諸機械多少ニ係ラス廉價ニテ送ルヘシ

羅紗見本入用ノ節ハ郵券八錢投ズベシ、總テ前金

●本館新發明衛生上婦人ニ不可欠●下バキ●ノ形紙有

大坂北久太郎町三丁目

朝陽館

本校廿四年一月十二日開校寄宿通學共入學ヲ許ス望ミノ諸姉ハ來校セヨ郵券貳錢ヲ送ラバ規則書ヲ呈ス

東京市芝區三田功運町三十番地

私立 普連土女學校

私立 明治女學校内に新設する職業科

本校内に新たに女子職業部を設け、本科生は二年にて、主計科は半年にて、兼修生は毎日半日づゝ修業二年にて卒業し、裁縫、編物、縫箔、陶器畫、作花、簿記筆算等の各種に上達することを得しむ。來年一月より開業可致に付、志願の人は本年中に申込あるべく、規則書入用の人は二錢切手封入通知あれ。

東京下六番町六番地

明治女學校

診察 毎日午前

外神田和泉橋通松永町廿三番地 渡邊泰

殊に女學生を優待し、別室を設け、尤も信切に診察すべし、倘學業中餘資なき人の爲に自由治療す。

東京經濟雜誌 第五百五拾貳號目錄

社説

◎讀窮民救助法案(第二)◎ヤツプ石貨幣ノ騷動◎破却セヨ箱入息子ノ主義ヲ◎北米合衆國ノ大博覽會ヲ利用セヨ(續)

論説

○商法ノ延期ハ毫モ理由ナシ○歳計豫算管見(一)○保護貿易論(其五)○鐵道開設ガ東北地方ノ產業ニ及ボス所ノ影響(續)

寄書

○牛蠻逸人ニ問フ○浦潮斯德港ニ乾船渠ヲ築造スルノ報道ヲ聞テ

歳計決算

○明治十九年度歳入歳出總決算豫算比較(表)

銀行及商業之況景

兌換銀行券發行高
同流通高及正貨準備ノ景況
外國諸銀行ノ景況
横濵ノ商況
東京金融ノ景況
東京公債及株券ノ商況
東京限月米及正米ノ商況
東京諸商品ノ商況

帝國議會

衆議院議員ノ質問及ビ國務大臣ノ答辯○三大臣ノ演說○青木大臣ノ演說○饒舌大臣默シ沈默大臣辨ズ○議會ヲシテ輕カラシムル勿レ○戸籍法案○商法ノ延期衆議院ニ於テ可決セラレタリ○稅權恢復ノ建議○法律案續々提出セラル○地租條例修正案○高梨氏○鳥尾氏

雜録

詳馬課及ビ山形縣水害ニ付キ豫備金支出○蠶種檢查法ニ對スル運動○萬子商の大會○ポテピニ於ケル西班牙知事ノ不遇○商業會議所發起人ノ申請書○二銀行同盟ヲ退ク○同盟銀行月次例會○神戸商業會議所ノ設立○外國爲替相場ノ騰貴○米人グレートハウス氏朝鮮ニ趣ク○十一月中足利物產市場取引統計表○茨城縣鉾田馬車鐵道○群馬縣會ノ中止○東京新報○商事新報

官令(數件) 定價一冊金七錢(市外郵稅五厘)

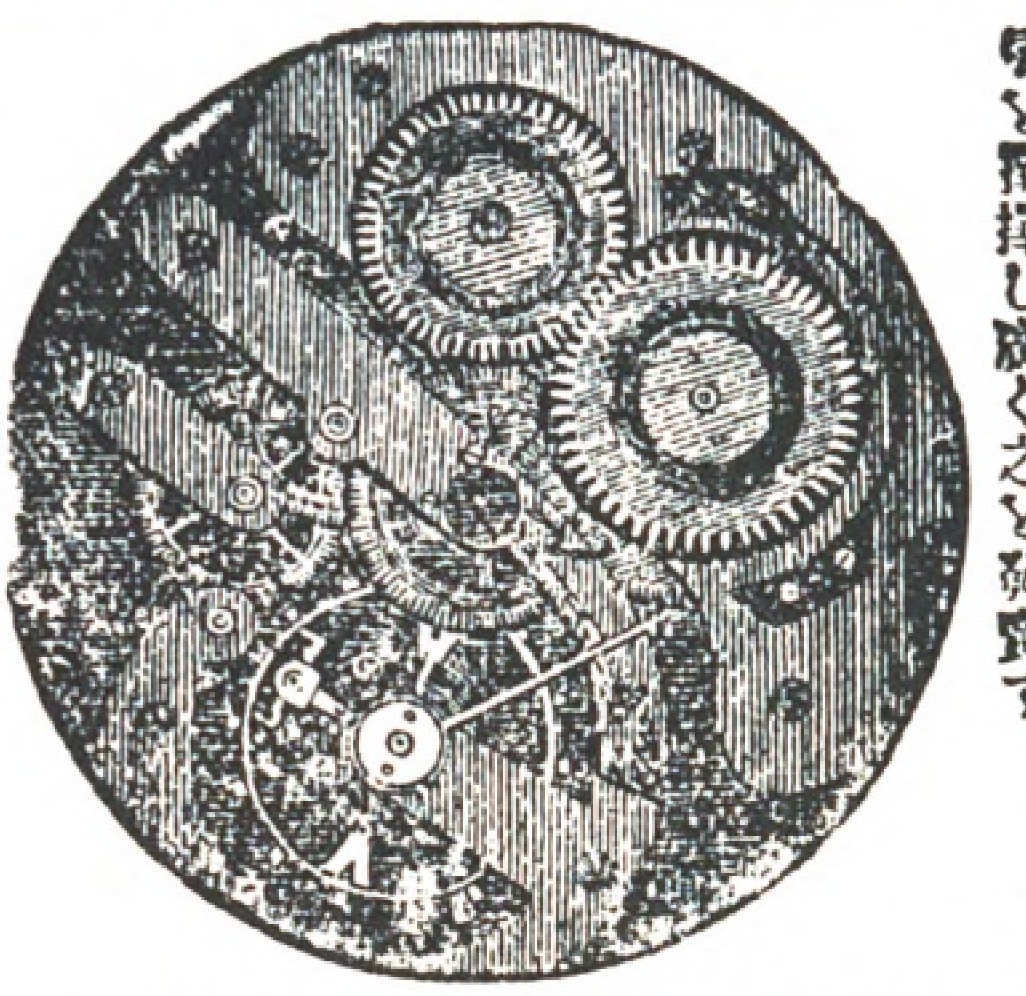
東京京橋區彌左衛門町

經濟雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンワルド横濱新九十番商會專賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處天賞堂該懐中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す



（金側）丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懐中時計器械本ニツケル二番より惣石入●丙價左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●市外遞送費廿錢（銀側）丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懐中時計器械プラチナ減金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニツケル卷上ゲ二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢

右時計は器械の堅牢なる弊堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正當の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時さ既に御購求の後に在るさに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限さす○保險年限中は特に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價さす○保險年限中自然器械の變化を生じ使用に堪へざる事あれば何時たりさも同種にして新規なる者さ交換又は原價を返却すべし●保險の有無に拘はらず御購求後三十日以内に限り交換又は原價の返戻を要せらるゝときは其望に應ずべし

今同又左の時計及時計附屬品洋服裝飾品各種を發賣す●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製（金側）十八金廿一形無雙龍頭卷懐中時計甲價百五圓●同乙價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●（銀側）同甲價廿圓●同乙價十六圓●同片硝子價十五圓●（金着側）同無雙甲價廿五圓●同乙價廿五圓

瑞西國製（金側）十八金廿一形無雙價廿九圓●同乙價廿五圓中時計器械本ニツケル卷上げ聲向ひ爪左アンクル二番より惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋乙價九十二圓●同甲價百十圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿缺十二ケ月七曜及日指し付價三百五十圓●（銀側）廿一形無雙裏三枚蓋金針入龍頭卷懐中時計器械本ニツケルル卷上ケ聲向ヒ爪左アンクル惣石爪石入價三十六圓●同片硝子右アンクル價廿九圓●同中硝子價廿六圓●同片硝子鍵卷懐中時計器械本ニツケル卷上ケ聲向ヒ爪左アンクル價十一圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價十八圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子十三形無雙龍頭卷懐中時計價廿九圓●同無雙金價十七圓半●同無雙金價十七圓半●同無雙金價六十六圓

貴婦人持時計（金側）十八金

時計附屬品　鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種

指環　金黄金剛石裝飾付及製見留印付寶石入各種

洋服裝飾品　腕輪胸飾ヒン手ボタン其他各種

交詢雜誌評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は米國製及び瑞西國の製品にして其の器械の堅牢なるさその構造の精緻なることその裝飾の美麗なること何れも世間の好評に違はざる良品なり尚且購求後三十日以内は購買者の自由に之を取換又は返還するを得て望みに依れば二十箇年を限り之を保險しその年限中は無代價にて之を修復するよしなれば購買者の爲め更に一層の便利なりさ云ふべし

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣する金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の最良完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來舶載の物に比すれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個毎に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以内は物品の交換原價の返却さも購客の望に任ずるさ云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲモ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲモ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精功なるに一個毎に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

郵便報知新聞評

○天賞堂時計　彫刻ニ有名ナル天賞堂（京橋區尾張町二丁目十八番地）ヨリ發賣スル時計ハ米國製或ハ瑞西國製ニシテ器械堅牢且ツ裝飾美麗ナルヲ以テ大ニ評判ヨク殊ニ購求後三十日以內ニ現物ガ氣ニ入ラヌ時ハ他品ト取換ヘ又ハ原價ヲ返戻スルヨシナレバ購客モ大ニ安心シテ買求メ望ミニヨリテハ保險ヲモ附シ其ノ年限內ハ器械及ヒ硝子ノ破損等ノ修復ハ無代價ナリト云フ

日本人評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は、歐米各種の製造品中より就き、特に器械の堅牢なるものを撰擇して、一個毎に丁寧なる取扱方心得書をも添へ、其上二十年間の保險を附するのみならず、購求後三十日間は、品物の變換、代價の返還さも凡べて其の望み通りに任かすさ云へは、購買者に取ては至極便利なりさ云ふべし。

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

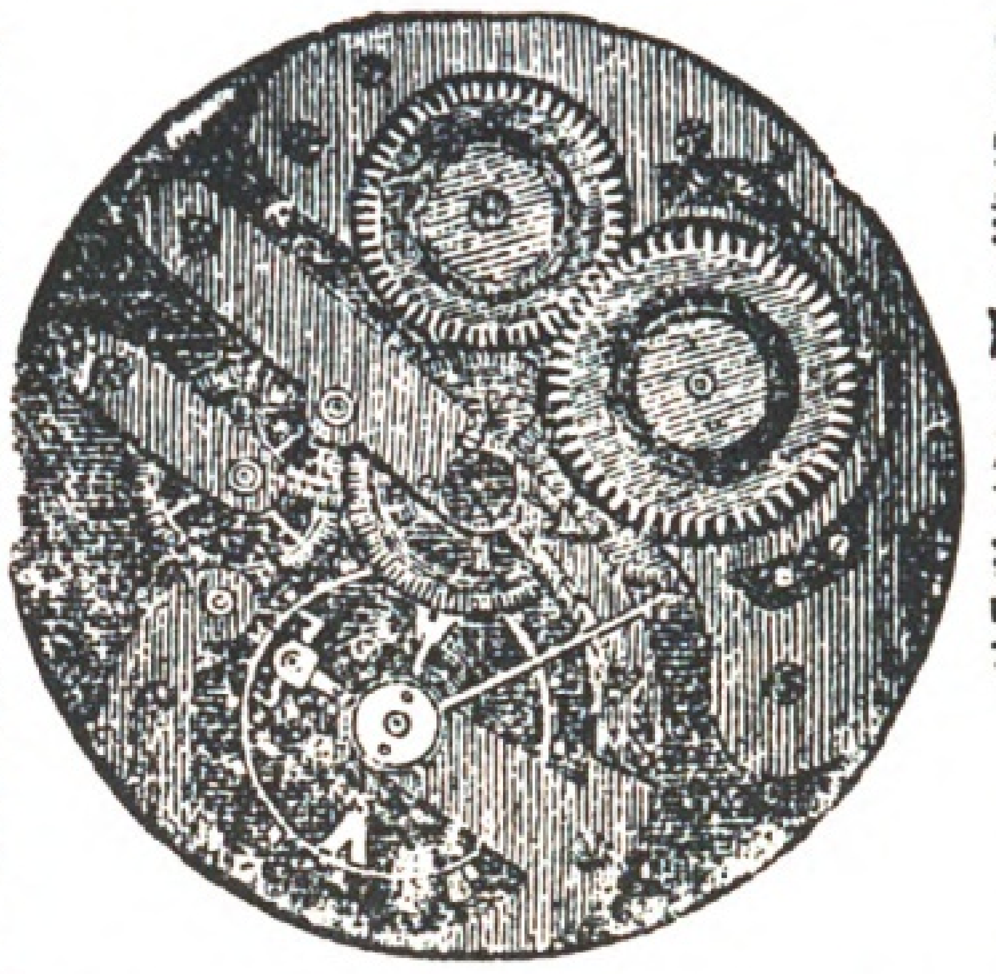
天賞堂

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンワルド横濱新九十番商會專賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處敝堂該懷中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す



（金側）丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懷中時計器械本ニッケル卷上げ鍔向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢●（銀側）丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懷中時計器械プラチナ滅金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニッケル卷上ゲ鍔二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢

右時計は器械の堅牢なる敝堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正確の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時と既に御購求の後に在るとに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限とす○保險年限中は特に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價とす○保險年限中自然器械の變化を生じ使用に堪へざる事あれば何時たりとも同種にして新規なる者と交換又は原價を返却すべし●保險の有無に拘はらず**御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戾とを要せらるゝときは其望に應ずべし**

今回又左の時計及時計附屬品洋服裝飾品各種を發賣す●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製（金側）十八金廿一形無雙龍頭卷懷中時計甲價百五圓●同乙價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●（銀側）同甲價廿圓●同乙價十六圓●同片硝子價十五圓●（金着側）同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製（金側）十八金廿一形無雙懷中時計器械本ニッケル卷上げ鍔向ひ爪左アンクル二番より惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋乙價九十二圓●同甲價百十圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿缺十二ケ月七曜及日指し付價三百五十圓●（銀側）廿一形無雙裏三枚蓋金針入龍頭卷懷中時計器械本ニッケル卷上ケ鍔向ヒ爪左アンクル惣石爪石入價三十六圓●同片硝子右アンクル價廿九圓●同中硝子價廿六圓●同片硝子鍵卷懷中時計器械本ニッケル卷上ケ鍔向ヒ爪左アンクル價十一圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價十八圓●

貴婦人持時計（金側）十八金十三形無雙龍頭卷懷中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品 鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種

指環 黄金 金製見留印付及寶石入各種

洋服裝飾品 腕輪胸飾ピン手ボタン其他各種

交詢雜誌評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は米國製及び夙に時計の製作を以て世に有名なる瑞西國の製品にしてその器械の堅牢なることその構造の精緻なることその裝飾の美麗なること何れも世間の好評に違はざる良品なり尚且購求後三十日以內は購買者の自由に之を取換又は返還するを得て望みに依れば二十箇年を限り之を保險しその年限中は無代價にて之を修復するよしなれば購買者の爲め更に一層の便利なりと云ふべし

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て有名なる京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣する金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の最良完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來船載の物に比すれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個毎に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却とも購客の望に任ずると云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲモ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精功なるに一個毎に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

郵便報知新聞評

○天賞堂時計　彫刻ニ有名ナル天賞堂（京橋區尾張町二丁目十八番地）ヨリ發賣スル時計ハ米國製或ハ瑞西國製ニシテ器械堅牢且ツ裝飾美麗ナルヲ以テ大ニ評判ヨク殊ニ購求後三十日以內ニ現物ガ氣ニ入ラヌ時ハ他品ト取換ヘ又ハ原價ヲ返戾スルヨシナレバ購客モ大ニ安心シテ買求メ望ミニヨリテハ保險ヲモ附シ其ノ年限內ハ器械及ビ硝子ノ破損等ノ修復ハ無代價ナリト云フ

日本人評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は、歐米各種の製造品中より就き、特に器械の堅牢なるものを撰擇して、一個毎に丁寧なる取扱方心得書とも添へ、其上二十年間の保險を附するのみならず、購求後三十日間は、品物の變換、代價の返還とも凡べて其の望み通りに任かすと云へは、購買者に取ては至極便利なりと云ふべし。

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1104
J74+

Jan. 1891
no. 246

女學雜誌

第二百四十六號 明治二十四年一月一日發兌

目錄。

歳暮悲からず新年更に樂し　中島俊子
簡易の懷爐。ストーブ　吉田伸子
正月理想上の料理　小島清子
初夢　田邊花圃
笑ひ草　清水豊子
米國禁酒會館の圖　繪ごよみ

大附錄。

知盛卿（長韻文）　雲峯子
こわれ指環　つゆ子

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY